上林中道南遺跡Ⅴ

――国道292号道路改良工事に伴う発掘調査報告書――

2004年３月

長野県中野建設事務所
山ノ内町教育委員会

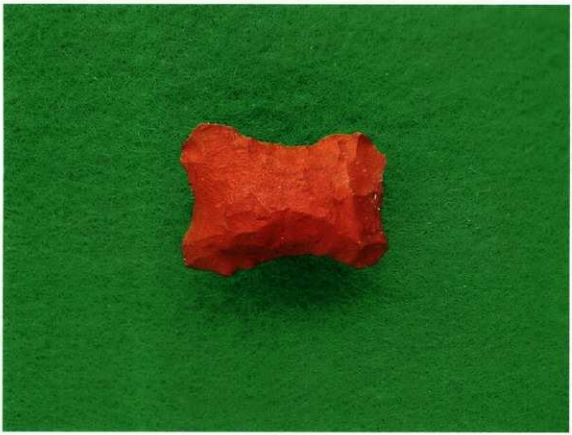
上林中道南遺跡Ⅴ

――国道292号道路改良工事に伴う発掘調査報告書――

2004年３月

長野県中野建設事務所
山ノ内町教育委員会

削　器



糸巻形石器

序

上林中道南遺跡は、山ノ内盆地の沓野台地の上方に位置し、国道292号を志賀高原に向かう旧上林ゲート料金所西側の農耕地と山林に所在する遺跡であります。

この遺跡は過去３回の発掘調査が実施され、竜神社地を水源とする竜宮川流域と広大な山岳地帯を背景に、旧石器時代後期から縄文時代草創期末～後期、平安時代の遺跡が確認されております。

今回、国道292号道路改良計画が提示され、平成14年11月に試掘調査を実施し、長野県中野建設事務所からの委託を受けて、平成15年６月から８月にかけて本格的調査を実施したものであります。

今回の調査でも貴重な遺物等が発掘され、当地方を代表する重要な遺跡であることが再確認されたところであります。

この発掘調査にご指導をいただき調査報告書をまとめていただきました檀原長則団長をはじめ、長期間にわたり大変ご苦労いただきました㈳中野広域シルバー人材センターのみなさま、ご協力をいただいた多くの関係者のみなさまに深甚なる感謝を申し上げ、序文といたします。

平成16年３月

山ノ内町教育委員会
教育長　中山　弘和

例　言

1　本書は山ノ内町大字平穏字桑山道南に所在する上林中道南遺跡の発掘調査報告書である。

2　発掘調査は平成15年６月２日～８月22日にわたって実地した。

3　本調査は長野県中野建設事務所の委託をうけ、山ノ内町教育委員会が実施した。

4　遺構及び出土遺物の注記は、下記のとおりである。

ＳＫ	土坑
ＳＢ	住居址
ＳＸ	不明遺構
ＳＤ	溝状遺構
シ	焼土
ケ	検出

5　調査区のグリッドは４ｍ単位で表示は北東からＡ′・Ａ～Ｅ、南西から１～24とした。

6　本文の原稿の執筆は檀原長則、竹田保夫が行った。文責は文末に記した。

7　石器実測・トレースは尾澤みつ子、写真撮影は竹田保夫が担当した。

8　長野県埋蔵文化財センターの中島英子氏と中野市教育委員会の中島庄一氏には遺物のご指導をいただいた。

9　本遺跡の出土遺物及び遺構図・写真等の記録資料は山ノ内町教育委員会が保管している。

目　次

カラーグラビア
序文
山ノ内町教育委員会　教育長　中山弘和
例言

第１章　経　　過……1
第１節　発掘調査前の経過……1
１　経　　過……1
２　調査団の構成……1
第２節　発掘調査の経過……1
１　発掘調査日誌……1
２　整理作業……3

第２章　遺　　跡……4
第１節　遺跡の位置と環境……4
第２節　土層の状態……6
第３節　上林中道南遺跡周辺の遺跡……7
１　周辺の遺跡……7
２　山ノ内町の押型文土器出土遺跡……10
３　今までの上林中道南遺跡の調査……10

第３章　遺構と遺物……16
第１節　遺構及び遺物の概要……16
第２節　旧石器時代……17
１　石　　器……17
第３節　縄文時代……17
１　遺　　構……17
２　土　　器……17
３　石　　器……20
第４節　古　　代……41
１　遺　　構……41
２　遺　　物……43
第５節　近世・近代……43
１　遺　　構……43
２　遺　　物……43

第４章　ま　と　め……46

巻頭写真図版目次
巻頭写真図版１　削器
巻頭写真図版２　糸巻形石器

挿図版目次

第１図　遺跡の位置……4
第２図　遺跡の範囲と調査区……5
第３図　周辺遺跡出土押型文土器……12
第４図　周辺の遺跡……13
第５図　遺構配置図……16
第６図　旧石器時代の石器……17
第７図　焼土ブロック……17
第８図　１号土坑……17
第９図　グリッド出土の縄文土器(1)……21
第10図　グリッド出土の縄文土器(2)……22
第11図　グリッド出土の縄文土器(3)……23
第12図　グリッド出土の縄文土器(4)……24
第13図　グリッド出土の縄文土器(5)……25
第14図　グリッド出土の縄文土器(6)……26
第15図　グリッド出土の縄文土器(7)……27
第16図　グリッド出土の縄文土器(8)……28
第17図　石器出土状況（模式図）……29
第18図　グリッド出土の縄文石器……29
第19図　１号住居址……41
第20図　１号住居址内出土の土師器……42
第21図　２号土坑……43
第22図　３号土坑……43
第23図　近代・現代の出土遺物……44
第24図　銭貨……44
第25図　砥石……44

挿表目次

表１　周辺の遺跡地名表(1)……14
表１　周辺の遺跡地名表(2)……15
表２　縄文時代土器属性表(1)……30
表２　縄文時代土器属性表(2)……31

表２　縄文時代土器属性表(3)……32
表２　縄文時代土器属性表(4)……33
表２　縄文時代土器属性表(5)……34
表２　縄文時代土器属性表(6)……35
表２　縄文時代土器属性表(7)……36
表２　縄文時代土器属性表(8)……37
表２　縄文時代土器属性表(9)……38
表２　縄文時代土器属性表(10)……39
表２　縄文時代土器属性表(11)……40
表３　古代土師器属性表……45
表４　近代陶器属性表……45

写真図版目次

図版１　１．鴨ヶ嶽城址から見た山ノ内盆地
　　２．調査区全景（北から）
図版２　１．１号住居址
　　２．１号住居址貯蔵穴
図版３　１．１号土坑
　　２．２号土坑
図版４　１．縄文土器(1)
　　２．縄文土器(2)
図版５　１．縄文土器(3)
　　２．縄文土器(4)
図版６　１．縄文土器(5)
　　２．縄文土器(6)
図版７　１．縄文土器(7)
　　２．縄文土器(8)
図版８　１．縄文時代石核と剥片
　　２．縄文時代異形石器
図版９　１．縄文時代石器
　　２．縄文時代石鏃
図版10　１．縄文時代敲石
　　２．灰釉陶器片
図版11　１．作業風景
　　２．全体写真

藤沢　光男　　社会教育係長
小林　元広　　社会教育係

第1章　経　　過

第1節　発掘調査前の経過

1　経　過

平成14年9月11日　長野県中野建設事務所から国道292号拡張工事に伴う埋蔵文化財発掘について長野県教育委員会あて通知がある。

平成14年9月27日　長野県教育委員会から発掘調査を実施するよう通知がある。

平成14年11月21日～22日　対象面積3,227㎡の試掘調査を実施する。

平成15年5月30日　委託者長野県中野建設事務所長と受託者山ノ内町教育委員会教育長の両者で、上林中道南遺跡の発掘調査委託契約を締結する。

委託期間は平成15年6月2日から平成16年3月19日とする。

2　調査団の構成

調査責任者　中山　弘和　山ノ内町教育委員会教育長
調査団長　檀原　長則　日本考古学協会会員、山ノ内町文化財保護審議会委員
調査員　竹田　保夫　長野県考古学会会員
調査補助員　関　武、橋内　賢裕
発掘作業員　社団法人中野広域シルバー人材センター
畔上三子男、畔上ちよ子、池田　泰造、
池田　良高、坂口　二郎、鈴木　金三、
田河　正文、竹節　行治、徳永　庄七、
徳永　徳一、富岡　栄康、中島　守利、
中林　喜一、水野　和夫、宮崎　光平、
武藤　良助、村上　治、山崎　秋雄、
横田六三郎
整理作業　尾澤みつ子、金井美知子、
小林　敦子、田中佐知子
協　力　社団法人中野広域シルバー人材センター
事務局　山ノ内町教育委員会事務局
白鳥　久男　教育次長

第2節　発掘調査の経過

1　発掘調査日誌

6月2日（月）

県建設担当、山ノ内町教育委員会、檀原調査団長、竹田調査員とで、調査区の確認と調査方法の打ち合わせを行う。引き続き、重機による表土剥ぎを行う。

6月3日（火）

重機による表土剥ぎを行う。

6月4日（水）

重機による表土剥ぎを行う。並行して残土片付けをミニ重機・クローラーダンプによって行う。

6月5日（木）

重機・ミニ重機・クローラーダンプによる表土剥ぎを行う。

6月6日（金）

前日と同じ重機による表土剥ぎを行う。コンテナハウスを設置する。

6月9日（月）

本調査を開始する。調査区において開所式をシルバー人材センター、山ノ内町教育委員会、調査団長、調査員、作業員16名が出席のもと行う。

開所式終了後、検出作業を行う。A－2グリッドの5層より石核と石鏃、A－4グリッドより石鏃、無文の土器片が出土する。A－3グリッドより焼土ブロックNo.1が検出される。重機（ミニ・クローラーダンプ・重機）による表土剥ぎを引き続き行う。

6月10日（火）曇り

遺構検出作業を行う。無文と沈線が施されている土器片が出土する。焼土ブロックNo.1を完掘する。重機による表土剥ぎを引き続き行う。

6月11日（水）曇り時々晴れ

遺構検出、遺物取り上げ作業を行う。A－3グリッドの5層より無文の土器片が集中して出土する。A・B－2グリッドの5層より9日に出土した石核の残片と思われるフレークが5点出土する。

重機による表土剥ぎ及び残土置き場のため撹乱されている場所を掘り下げる。

6月12日（木）晴れ時々曇り

遺構検出作業を行う。A－4グリッドに設置したベルトのセクションを実測する。7グリッドから西側の遺構検出を始める。A－5グリッドの5層より山形文が施されている土器片が出土する。

6月13日（金）晴れ一時雨

重機による表土剥ぎを行う。重機による表土剥ぎは本日をもって終了する。

6月16日（月）曇り

7－B・Cグリッドに検出された遺構は風倒木痕と思われる。B－8グリッドの4層より結束がある羽状縄文土器片が出土する。

6月18日（水）曇り

B－10グリッドの2層より口縁直下に1条の沈線があり、他の部位は無文の土器片が出土する。

6月19日（木）晴れ時々曇り

B－9グリッドより条痕文が施されている土器片が出土する。土器出土状況の写真撮影をする。凹基無茎石鏃が出土する。

6月20日（金）晴れ時々曇り

遺構検出作業を行う。B－10グリッドより糸巻形石器が出土する。B－9グリッドより諸磯c式の土器片が集中して出土する。

6月23日（月）曇り

13グリッドより北側の遺構検出作業を行う。B－11グリッドより無茎石鏃が出土する。

6月24日（火）曇り時々雨

遺構検出作業を行う。B－13グリッドより楕円文がまとまって出土する。底部は無いが胴部から口縁部までは完形になりそうである。

6月26日（木）曇りのち雨

遺構検出作業を行う。A－13グリッドの押型文出土下層から口縁部の表裏縄文土器片が出土する。

6月27日（金）曇り

C－12・13グリッドより中央に結束がある羽状縄文、C－13グリッドより打製石斧、C－19グリッドより土師器が出土する。

調査区の南より44mの調査を終わる。

6月30日（月）晴れ

D－21グリッドより絡状体圧痕文、C－12・13グリッドより中央に結束がある羽状縄文、C・D－15グリッドより貝殻状文、D－17グリッドより単節縄文が出土する。地層断面実測はA－14グリッドのベルト面で行う。

7月1日（火）曇り

D－15グリッドより横位と斜位との、条痕が施されている土器片が出土する。

7月2日（水）晴れ

18グリッドより北側の遺構検出作業を行う。

7月3日（木）曇り

遺構検出作業を行う。覆土内に大量の炭化物を含む、長径約280cm、短径180cmの楕円形SX－1を検出する。

7月4日（金）晴れ

遺構検出作業を行う。A－16グリッドより砂岩製の石匙が出土する。

7月8日（火）曇り時々晴れ

C－17グリッドより半截竹管文土器、B－17グリッドより寛永銭が出土する。焼土ブロックを検出するが、落ち込みは確認できない。

7月9日（水）晴れ

遺構検出作業を行う。A－17グリッド、黒色の落ち込みを掘り進めるが黄色土の下に黒色土がさらに入り込んでいるため風倒木痕と思われる。

7月10日（木）曇り

遺構検出作業を行う。B－18グリッドより平行線と楕円文を併用する土器片と、平行線と楕円文を併用する土器片が出土する。

7月11日（金）

遺構検出作業を行う。B・C－17グリッドより回転系縄文土器片と楕円文が集中して出土する。

7月14日（月）雨

遺構検出作業を行うが、雨のため午前中で調査を中止する。溝状遺構完掘の写真撮影を行う。

7月15日（火）曇り

本日より残土運搬用にクローラーダンプを導入する。C－16グリッドの3層（黒色層）より土師器が出土する。B－17グリッドより炭層と焼土ブ

ロックを含む落ち込みを検出し、ＳＸ－３とする。Ｃ・Ｂ－19・20グリッドより炭と焼土を含む層を検出し、１号住居址とする。

７月16日（水）

19グリッドから北側の遺構検出作業を始める。住居址№１にベルトを設定し、住居址内を掘り下げる。

７月17日（木）

ＳＸ－１を完掘する。１号住居址に長径160cm、短径65cmの土坑を検出する。焼土と炭を含む層より土師器片が出土する。Ａ′－20グリッド、縄文包含層下層より石刃と思われる玉髄製の剥片が出土する。

７月18日（金）

１号住居址内の土坑にベルトを設け掘り下げる。底部より坏が出土する。

７月22日（月）

Ｃ－17グリッドより剥片が３点出土する。Ｃ－16・17グリッドで１号住居址の地層断面観察をする。

７月24日（木）晴れ

１号住居址の南側側縁部の検出を行う。Ａ′－20グリッドよりサイド・スクレイパーが出土する。出土地点は剥片石器が出土した西150cmで石材は同質の玉髄と思われる。Ｂ・Ｃ－17グリッドより押型文が施された土器が集中して出土する。

７月25日（金）曇り一時雨

１号住居址のカマドと思われる集石部の実測をとりながら掘り下げる。

Ｂ－18グリッドより長径６cm弱のポイントが出土する。ポイントは両面に周辺調整が施されている。

７月28日（月）晴れ

１号住居址のカマド部分の検出を行う。Ｃ・Ｂ－18・19グリッドから土坑を検出する。

７月29日（火）曇り一時雨

１号住居址を完掘する。検出作業を続けるが、遺構・遺物は確認できず。

７月31日（木）曇り一時晴れ

１号住居址内で柱穴を４箇所検出する。１号住居址の付属施設であるかは断定できず。１号住居址の外部施設を確認するが検出できず。

８月１日（金）曇り時々晴れ

20グリッドより北側の遺構検出作業を行う。

８月４日（月）

20～23グリッドの遺構検出作業を行う。

８月６日（水）

20～23グリッドの遺構検出作業を行う。尖頭器状の石鏃が出土する。

８月７日（木）晴れ一時曇り

20～23グリッドの遺構検出作業を行う。Ｃ－23・24グリッドより溝状遺構を検出する。

８月８日（金）晴れ

調査区北側の遺構検出作業を行う。Ｃ－21グリッドより無茎石鏃が出土する。

８月18日（月）曇りのち雨

Ｃ・Ｄ－19・20・21グリッドの遺構検出作業を行う。Ｃ－21、Ｄ－21グリッドよりそれぞれ10点ほどの回転系縄文土器片が出土する。

８月19日（火）晴れ

Ａ・Ｂ－22・23・24グリッドの遺構検出作業を行う。

８月20日（水）

Ｃ・Ｄ－21・22・23・24グリッドの遺構検出を行う。Ｃ－24グリッドより区画文が施されてある土器片が出土する。

８月21日（木）

調査区北側部分での検出作業を行う。前日、出土した区画文土器片と同個体とも思われる土器片が出土する。

８月22日（金）

器材の撤収を行う。現場作業はすべて終了する。

２　整理作業

土器洗いを山ノ内町役場において８月25日～27日まで行う。

整理作業は中野市中央の中野広域シルバー人材センター事務所２階を作業所として、注記、遺物実測、遺物修復、遺構図、地層断面図、そしてトレースはそれぞれ並行して行い１月16日に終了する。

印刷は１月29日に入稿し、以降は校正と並行して遺物及び記録資料の残務整理を行う。（竹田）

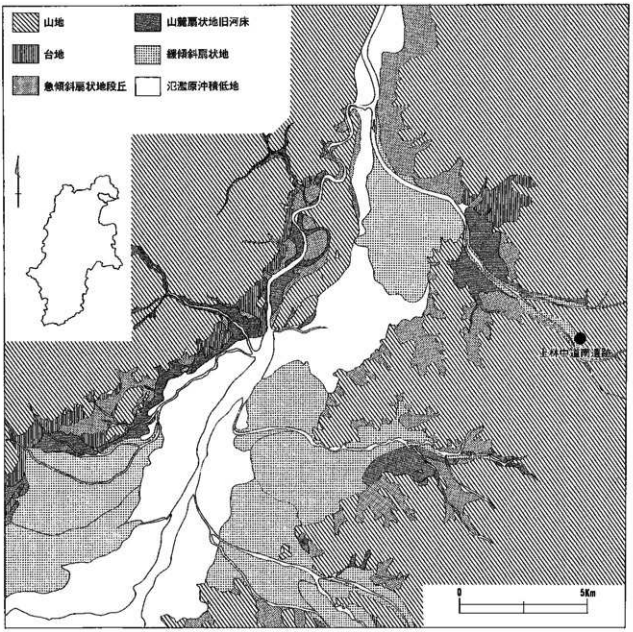
第2章　遺　　跡

第1節　遺跡の位置と環境

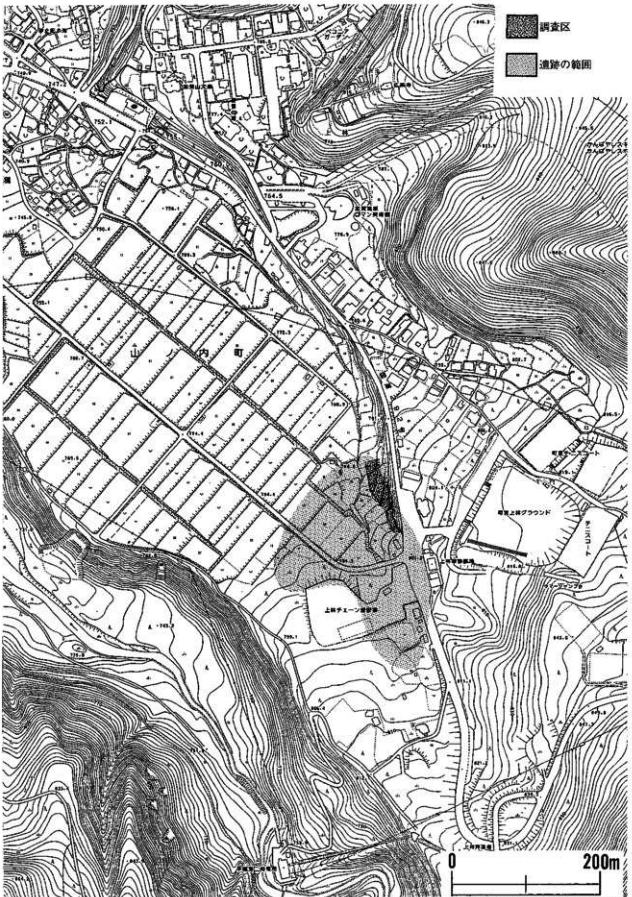
山ノ内町は長野県の東北端に位置し、東部山岳地帯には横手山など標高2,000m級の山があり、群馬県に接している。この山岳地帯は、志賀高原と呼ばれている。その麓の農耕地帯でもある山ノ内盆地は、標高800m以下で、町総面積の7分の1の割合で、大部分を山地で占めている。

この志賀高原（山地）と、山ノ内盆地の接点に位置するのが上林中道南遺跡である。この遺跡は過去2回の本調査が行われている。第1回の調査は昭和59年（1984）沓野地区圃場整備事業に伴うもので、縄文時代早期・前期・平安時代の遺物と、早期の住居址を検出している。

つぎは志賀高原で1998年に冬季オリンピック開催のため、長野県によって道路整備事業が行われ、チェーン着脱場の建設が遺跡内に計画され、平成



第1図　遺跡の位置



第２図　遺跡の範囲と調査区

6年（1994）11月の試掘調査、続いて7年（1995）5月より本調査が開始された。その結果、縄文時代草創期末・早期・前期・中期・後期・平安時代の遺構・遺物が検出されている。

今回、当該遺跡の調査の原因は、とくにチェーン着脱場に至る国道292号の渋滞緩和のため、道路拡幅工事計画によって、発掘調査が行われた。平成14年（2002）11月試掘調査、翌年6月から本調査が行われた。

上信国境に位置する横手山（2,304.9m）方面より発する角間川と、赤石山（2,108.6m）の麓の大沼池に発する横湯川は、志賀高原の山間を抜けて合流する。この合流地点の台地を通称島崎といい、この台地面に沓野集落が存在する。この台地はほぼ三角形状を成している。その成因は、はるかなる地質年代に、山ノ内盆地を形成した第1次堆積物（地表）を、両河川が下刻作用を行った結果形成されたものである。遺跡南方の角間川の崖面は50mの落差がある。

この台地の山よりの基部に当該遺跡があり、標高は800m前後である。遺跡の東に竜宮さんと呼ばれる清水があり、清冽な清水が多量に湧出し、小川となって遺跡を貫流し、竜宮川と呼ばれている。源泉地は沓野の天川神社の社有林で、赤松などの自然林があり、清水は神聖視され、この清水は沓野集落形成の原点の一つと考えられる。

三国山脈に属する志賀高原の上信国境は、利根川水系と千曲（信濃）川水系の分水嶺である。ここには、人跡未踏とみられる広大な山地が含まれている。山ノ内町の気候は、この上信山地で関東地方と北陸地方とに二分され、冬季は北西季節風が強く、降雪が多く、寒気が厳しく北陸型である。夏季は一日の温度差が大きく内陸盆地型となる。

冬の気候は、中野平面、山ノ内盆地面、志賀高原と標高による温度差がとくに大きく、当該遺跡は盆地面と高原面の接点に属している。

交通面からみると、昭和10年（1935）代に国道292号の当初の路線が開設されるまでは、調査地北方で十二沢に上がり、波坂（滑坂・なめっさか）を過ぎて、法坂から硯川沿いの道をたどり、横手山（2,304.9m）の中腹の渋峠（2,100m・あちゃとだんべの国境）を越え、群馬県白根山を過ぎて草津町まで行程28kmであった。

関東の奥座敷として発展している草津温泉も、近世では冬場だけの営業であった。また吾妻渓谷に自動車道が開かれるまでは、山ノ内町方面から食料その他の供給をうけていた。近世では牛背による輸送手段であったが、幕府に公認された菅平高原を通る大笹街道に対して、抜荷道の扱いをうけていた。しかし経済の発展に伴い、次第に規制は緩和される傾向にあった。

明治以後この山道も次第に改良され、馬による輸送にかわると、朝6時に沓野を発つと、午後3時には草津に着いたといわれている（『長野県下高井郡沓野民俗誌稿』1981）。

このような信州・関東方面からの交通手段は、原始時代から継続されたものとみられ、中部山地を含めた文化交流の痕跡が、遺跡の出土遺物に反映していると思われる。（檀原）

第2節　土層の状態

前節で述べたように本遺跡は、志賀高原の山並みから続く旭山、坊平からの麓にあり、上部に十二沢遺跡がある。発掘地は竜宮川に向かって崖錐状の地形を成している。しかし、この発掘地上方に建設された国道292号によって原地形は損なわれている。さらにきつい傾斜のため、堆積土の移動も多かったと推定される。

また、近代初期と推定される水田の造成（水田の下層から1銭・半銭が出土）によって改変され、原初の土層を示す箇所は、水田の削平・均平のため埋め立てられた箇所に限られていた。

山ノ内盆地は、基盤岩の上に第1次堆積物が積もっている。ここには礫層に細砂、粘土などが挟まっている。また、発掘地は山麓に近いため、堆積岩が随所にみられた。この遺跡面は山ノ内町の地質分類では佐野面と呼ばれている。礫は主にひん岩と安山岩の亜角礫・亜円礫で、径1mに達するものもある。これらの表面は、酸化鉄に覆われ

ているものがある。

砂礫層上の細砂は、黄色を呈して粘土化している箇所もあるが、火山堆積物のローム層はみられない。砂礫層や堆積岩の上には、黒ボク土（黒ノボまたはノボ土）が堆積している。この黒ボク土の主成分は火山灰土で、現在も活火山とされる妙高・浅間・草津白根山などから供給されたと推定される。

このように前記の完新世諸火山など最終氷期の降下テフラがこの遺跡にも堆積して母材となり、草木植生（ススキ・ササなど）などの腐植が黒色土を成している。遺跡での観察によれば土中には多量の炭化物の細片がみられ、これは原始から近世～近代までの人による行為が残された結果と推定される。

草萌えをよくするため、害虫の駆除、焼畑農耕、野火（火災）などの現象のほか、平安時代の住居址付近（B－17・18）には生活、生産（木材の加工など）の残滓の炭化材と推定されるものが混和されていた。

この黒ボク土の腐植物基底層C14年代は、6000ｙＢＰを示す場合が多いとされている。また、1万年経過すると、この腐植土が黄色土化するといわれている。これによって年代の遺物出土標準が推定されるが、遺跡の立地は、崖錐状の傾斜地のため、堆積・浸蝕の自然行為が行われたと推定される。

調査地が道路に沿った細長い地形のため、層序が一定しないが、基本的な土層の状態を大別すると、つぎのようである。

層序（遺物包含層）

1層　耕作土（黒ボク土）

2層　黒色土（黒ボク土・遺物包含層）

3層　明黒色土（黒ボク土・遺物包含層）

4層　黒色粘質土にスコリアを含む（風化の進んだ黒ボク土と母岩の風化層・表裏縄文土器包含層）

5層　灰黒色土にスコリアを含む（主として母岩の風化層・旧石器時代石器包含層）

（檀原）

第3節　上林中道南遺跡周辺の遺跡

1　周辺の遺跡（第4図）

ここでは山ノ内町の、旧石器時代後期から縄文時代にかけての遺跡・遺物について概観する。

木戸池遺跡（2）志賀高原　年代は昭和10～20年代と推定されるが、志賀高原木戸池付近の遺路開設の時、石刃が出土したと伝えられる。遺物の所在は不明。

十二沢遺跡（3）平穏　本調査地より山際に位置し、遺物は縄文前期の土器片（上原式土器）と打製石斧が出土している。

島崎遺跡（4）沓野横道西　沓野の横湯川と角間川の合流地点の段丘上にある遺跡である。現在は水田地帯となっている。平成5年（1993）山ノ内町がここにレジャー施設（リズミカルランド）を計画し、遺跡の範囲確認調査を行った。その結果かなり大きな遺跡と確認された。その後、施設の計画は中止となった。

縄文土器は、早期の絡状体圧痕文・条痕文土器がみられるが、中期のものが多い。阿玉台・勝坂・加曽利E式で、最的には加曽利E式が多い。石器は磨石斧・打石斧・石匙・石鏃・石棒などが出土している。

弥勒遺跡（5）湯田中弥勒　大字平穏小字弥勒に弥勒石仏が堂内に安置されている。この所在する段平地が遺跡で、縄文中期の土器などが発見されている。

金毘羅遺跡（6）平穏　湯宮神社裏の小山に遺跡はある。遺物は縄文時代の石棒が表面採取されている。

山ノ内中学校校庭遺跡（7）上条堤　小字堤にあり、中学校造成時に縄文土器の細片が出土している。

三社遺跡（8）大字平穏小字大原　戦後、新湯田中温泉裏の夜間瀬川の崖から頁岩製の石刃が発見された（文献『山ノ内町誌』1973・『下高井郡山ノ内町所在埋蔵文化財分布調査報告書』ほか、以下同じ）。しかし現在は所在不明とのことである。

吉沢遺跡（9）上条吉沢　住宅の所から東に存在する遺跡で、加曽利E式土器片と、磨石斧・打石斧・石鏃などが発見されている。

上条的場遺跡（10）上条　上条区から戸狩方面に向かう道下にある遺跡で、縄文前期末の土器と石鏃などが出土している。

円生里遺跡（11）寒沢　寒沢集落の奥、三沢川の南に遺跡があり、縄文時代の磨製石斧・石鏃・垂玉（滑石）などが発見されている。

堀ノ内遺跡（12）**・富士宮遺跡**（13）寒沢　遺跡は寒沢集落下方にあり、三沢川の段丘上に点在している。縄文時代の磨製石斧・打製石斧・石鏃・石錐などが採集されている。

佐野遺跡（14）佐野　大字佐野小字畑中・谷地に所在する。現在国指定史跡。昭和7年（1932）神田五六氏が『考古学』3巻3号に「信濃国下高井郡佐野の土器」の論文を発表され、学会の注目されるところとなった。そして、昭和33年（1958）と翌年に長峯光一氏などを指導者として、発掘調査が行われた。遺跡は黒土層中に存在するため、明瞭な所見が困難であった。成果は、集石跡7箇所、石囲い炉址1、埋設土器1などの発見であった。

土器は縄文晩期前半のものが多く、中部山岳地帯の特色のあるもので、佐野式土器と名付けられている。組成土器は、大きく精製と粗製に分かれている。佐野式土器は、1式と2式に分けられ、1式は東北の亀ヶ岡式系の文様からくる三叉文・入組文・鉤手文・列点文がみられ、量的に優勢である。これらは大部分大洞C1式に併行するとみられる。

佐野2式土器は1式にみられた連鎖状三叉文を基に、大洞2式の入組工字文の影響をうけた粗大工字文を特徴としている。器形には浅鉢・壺・甕がある。1・2式とも口縁に沈線のある粗製深鉢を伴っている。また土偶も2点発見されている。

発掘による石器は、石鏃は320点（有茎85%、無茎15%）、石錘80・磨石1・尖頭器16・石剣2・石刀1・石皿4・石斧8（磨6）・凹石8・垂玉1・石匙3・石白2・石篦2・敲打器2などで、獣骨（シカ・イノシシ）なども検出されている。

昭和51年（1976）佐野遺跡範囲確認調査が行われた。調査坑は50箇所ほどで、遺物の出土状況から遺跡の範囲が確認された。そして12月に国指定史跡となった。その後は数回にわたって緊急発掘調査が行われている。

平成15年8月には「縄文セミナーの会」の佐野式土器の再検討が行われ、近く成果が発表される予定である。

上佐野遺跡（15）佐野　小字山崎の遺跡である（『佐野之歴史』1979）。水道工事中発見されたもので、20mほど離れた所から梅円押型文と、中期の土器と石器が発見されている。また、小字前林からも縄文中期の土器片・石器が発見されている。

日影遺跡（16）戸狩　箱山峠（トンネル）東にあって、縄文時代の磨製石斧・打製石斧が表面採取されている。

川原遺跡（17）戸狩　大字戸狩集落の下手にあって、平坦である。縄文時代の中期末から後期初頭の土器片が出土している。

四ツ屋遺跡（19）上条四ツ谷　耕作の時に出土したものである。加曽利E式土器の土器片、そのほか石鏃・凹石・砥石などが発見されている。

上条遺跡（21）上条　小字中原に所在する。昭和40年（1965）湯本直治氏が水田の区画整理を行って発見された遺跡である。加曽利EⅢ式土器・管状土錘など、土器片多数・打石斧多数・石鏃などが発見されている（『山ノ内町誌』1973ほか）。

北ノ窪遺跡（22）横倉　五輪山（1,690.3m）系と臀出山（1,320m）のゆるい傾斜面の標高1,100mの所に、明治42年（1920）炭窯を築く時、単独出土したものである。長さ20cmの頁岩製で、先端部を磨いた御子柴型石斧である。所蔵は横倉の坂口兆氏である。

須賀川地区の遺跡（24～26）夜間瀬地区の須賀川盆地（標高700m前後）は、東西3km南北4kmほどの小盆地である。町のほかの集落からは、別天地の環境にある。この盆地からは縄文草創期から平安時代の遺物・遺構が発見されている。

下明神遺跡（24）下須賀川　各種の押型文土器

から前期の土器・石器が耕作の時に発見されている。

八丁原遺跡（25）八丁原　遺跡は小丸山の西麓で白沢川のほとりにある。標高800mを数える。戦後開拓団によって開墾された。昭和34年(1959)発掘調査が行われ、平安時代国分期の住居址と土器などが検出されている。また、周辺の調査で押型文土器、前期の諸磯ｃ式土器などが発見されている。さらに昭和40年(1965)滝沢善次郎氏によって、長さ8.7cmの有舌石槍が表面採取されている。両面加工の頁岩製である。

土橋遺跡（26）土橋　土橋集落の神社の周辺に遺跡がある。縄文中期の土器と石鏃などが発見されている。

とおみ通し遺跡（28）前坂　高社山（1,351.5m）と飯盛山（犬首山・1,064.1m）の間は大きな鞍部となっている。ここは通称「とおみ通し」(750m）と呼ばれている。ここにゴルフ場（志賀高原カントリークラブ）建設が計画され、その整地作業中に発見されたものである。黒色土層は30cm、以下赤褐色の粘土層（高社山火山噴出のローム層）である。この地表下60cmの所から発見されたという。黒曜石製の剥片で、使用痕があり、残存の法量は長さ3cm、幅3.6cm、厚さ0.9cmである。

発見後、先端部が欠損したが、尖っていたというから錐状工具ではないかといわれている。

北志賀よませ温泉スキー場遺跡（30）前坂　先のとおみ通しから約1,000m下の、スキー場下の畑（当時）から頁岩製の石刃が発見されているが、詳細は不明である。

坂原遺跡（29）前坂　**上前坂遺跡**（32）前坂

坪根遺跡（31）前坂　**前坂遺跡**（33）前坂

以上は前坂の集落周辺に位置する遺跡である。縄文早期から後期の土器・石器が発見されている。なお、山ノ内町では遺跡の範囲確認調査が一部を除いて実施されていないため、遺跡所在地は点による図示にとどまっている。

上野遺跡（34）横倉　臂出山方面から流れる笹川のほとりに遺跡がある。元は水田地帯で、昭和23年（1948）頃の山なおし（形状を整える）の時、遺物が出土し、山ノ内西小学校が所蔵している。縄文時代の石器類で、土器はみられない。

矢崎遺跡（35）横倉　横倉集落の南方に夜交氏の山城がある。その麓をやや北に向かった所から半磨製の石斧、打製石斧が発見されている。

横倉遺跡（36）横倉　横倉集落の東、小字城の腰にある。地元の山上右八氏が遺物を収集された。土器は縄文時代前期の南大原（諸磯ａ式）・上原（諸磯ｂ式）・下島式のものである。石器は石棒破片・打製石斧・磨製石斧・石匙・石鏃・黒曜石製の釣り針状石器がある。

天神森遺跡（38）横倉　横倉集落の中にある。遺物は縄文時代の石棒・石鏃・磨製石斧である。柳沢正義氏が所蔵している。

宇木遺跡（39）宇木　宇木区の小字免山の斜面に所在する。縄文前期の有尾式（黒浜式）の土器片と、打製石斧・石匙・石鏃が発見されている。

夜間瀬本郷遺跡群(40～43)　遺跡は本郷区の中に点在している。縄文から平安時代の複合遺跡である。地点別に遺跡がある。

町遺跡（40）本郷　本郷区の中心部にある。遺物は縄文時代前期の諸磯式土器が中心で、抉状耳飾・乗玉・磨製石斧・半磨製石斧・打製石斧・凹石・石鏃などの石製品が発見されている。

町浦遺跡(41)　本郷集落東北部の台地状の所で、泡貝川に面している。縄文時代前期の有尾式・南大原式・上原式・下鳥式（諸磯ｃ式）と、中期の阿玉台式土器片が発見されている。石器は石棒・磨製石斧・打製石斧・石錐・凹石・石鏃などで、地元の畔上秀雄氏と、山ノ内西小学校で保管している。

東町遺跡（42）本郷　町遺跡の東方にあり、縄文前期の有尾式（黒浜式）・南大原式（諸磯ａ式）土器・土製耳飾が採集され、磨石・打製石斧・凹石・石鏃などもみられる。

伊勢宮遺跡（43）本郷　本郷区の神社の周辺の遺跡で、上条からの環状地束墻にある。泡貝川の南に位置する。縄文前期の関山・南大原式（諸磯ａ式）、中期の勝坂・加曽利Ｅ式、後期の堀ノ内式、晩期の佐野式土器と、磨石斧・打石斧・石槍・石

鏃・石鏃・石皿・敲石・凹石・石棒・垂玉などの石製品が発見されている。昭和54年度（1979）夜間瀬南部地区再編農業構造改善事業（圃場整備）に伴う発掘調査で、堀ノ内式期の柄鏡形敷石住居址などが検出されている。

また、本郷区の上条境からも磨石斧が2点発見されている。

雀崎遺跡（44）上条　昭和54年（1979）佐野式土器片が上条区の小字雀崎の水田地下から湯本英雄氏により発見され、その隣地からも発見されている。ここは泡貝川の中流で、川からは微高地の所である。そのほか磨石斧・打石斧・石鏃・石棒などが発見されている（『上条区史』1994）。

横前遺跡（45）宇木　宇木八柱神社の西下に遺跡がある。耕作の時に出土したものである。縄文時代の有舌石槍・石鏃・石皿などがある。

2　山ノ内町の押型文土器出土遺跡

縄文時代早期に属する押型文は、長さ5㎝内外の細い丸棒などに刻みを入れ、土器面を転がすことによってつけられた文様である。この押型文土器は、縄文などの土器にくらべて文様の特異さから注目されてきた。このようにして山ノ内町の押型文土器出土遺跡は、7箇所知られている。また、周知のように押型文土器出土遺跡は、平安時代の遺跡とも複合することが知られている。山ノ内町の押型文土器出土遺跡の立地を大別すると①高社山東麓方面と、②夜間瀬川の上流、角間川の両岸である。いずれも背後に奥深い山を控えた所である。

山ノ内町北部の須賀川盆地は、標高700m内外で周囲を山に囲まれ、東部に志賀高原に続く山並みが続いている。気候は冷涼で、豪雪地帯でもある。

1　下明神遺跡（第4図24）

昭和36年（1961）八丁原遺跡の発掘調査（平安時代）の折に周辺調査が行われ、確認された遺跡である。押型文の基本文様の山形文・格子文・楕円文土器片（第3図9～19）が表面採取されている。楕円押型文土器には文様に大小があり、山形文と組み合わされるものもみられる。

2　坂原・上前坂遺跡（第4図29・32）

高社山東麓の南面する前坂に所在する遺跡である。標高は700m内外である。地元の湯本重幸氏の採集された押型文土器には高山寺式と思われる土器片もある。ほかは山形と楕円の押型文である。

3　上佐野遺跡（第4図15）

遺跡は夜間瀬川左岸段丘面上にあり、内角間川北側にある。標高680mほどである。この遺跡が最初に報告されたのは、『佐野之歴史』（1979）である。それによると昭和47年（1972）8月、徳竹隆氏が小宮岩松氏（佐野2081）の庭先で水道工事中、土器の破片と石器のようなものを発見された。土器は写真によると、縄文中期の仮称深沢式のものと推定される。その後昭和52年（1977）9月、となり下の中島三男氏宅の入り口で、同じ徳竹氏が水道工事中地下約50㎝の黒土層（下は黄色土）から楕円押型文土器27片（第3図1～8）を発見した。厚さ0.6㎝で器色は明・暗褐色を呈し、胎土に石英などがみられる。

破片はすべて全面に楕円押型文がみられ、細久保式段階の所産と推定される。資料は山ノ内町南小学校に保管されている。

3　今までの上林中道南遺跡の調査

昭和42年（1967）『山ノ内町誌』編纂のため、大字平穏小字上林中道間（上林中道南遺跡の内）の土壌調査が実施された。この時、地表下1mの所から黒曜石の石核（石器をつくる原石）が発見されている（『山ノ内町誌』1973）。上林中道南遺跡が文献上に初見されるのは、町教委「下高井郡山ノ内町所在埋蔵文化財分布調査報告書」1972である。ここに前記の記事と、縄文期の土器細片と石屑が表面採取され、土師器片（国分期）も出土していると記されている。

昭和58年（1983）遺跡該当地に団体営圃場整備事業が採択され、60年第1次発掘調査が実施された。調査地は圃場整備事業の行われた上端部の水田であった。

遺構は縄文期では「コの字型」をした石囲み炉

址で、主体の土器は鵜ヶ島台式土器であった。そのほか集石状遺構があった。平安時代の国分期の住居址は、東南のコーナーに石芯の炉址をもつものであった。

土器の遺物は表裏縄文・撚糸文があり、押型文には山形文が口唇部に施文されたものである。そのほか無文・沈線文・突刺文のみられる鵜ヶ島台式土器、絡状体圧痕文土器などの早期土器があり、縄文前期では有尾式（黒浜式）の羽状縄文・縄文・竹管文・肋骨文などがみられる。

平安時代の土器は国分期のもので、杯・甕・足高高台土器などである。

石器は特殊磨石・凹石・磨石・着柄部分が偏った有舌尖頭器（頁岩）・石鏃・剥片石器などである（山ノ内町教委『上林中道南遺跡』1985）。

平成10年（1998）に長野冬季オリンピック、アルペン競技の志賀高原での開催が決まり、その交通対策、従前からの交通渋滞の解消を目的として、この玄関口にあたる当遺跡にチェーンベース（チェーン着脱場）の建設が計画され、平成6年（1994）11月、遺跡該当地の試掘調査を実施し、調査面積の確定、遺物出土状況の把握が行われた（山ノ内町教委『上林中道南遺跡Ⅱ』1995）。

前年の調査結果をうけて翌年5月より発掘調査が行われ、9月末に現地調査が終了した。

遺構は、縄文時代早期と推定される円形の住居址4で炉址は屋内にはみられない。前期と推定される円形の住居址1は石囲み炉が中央にあった。その他、土坑・溝などが検出された。平安時代の住居址1は方形で、焼土ブロックが2箇所みられる。1箇所は屋内中央で、1箇所は南の柱間に存在した。

遺物の土器は縄文草創期末～早期の表裏縄文土器で、内面の下部まで施文され、指頭圧痕の認められるものなど各種がある。

早期の撚糸文土器は少量であった。押型文土器は立野式・樋沢式・細久保式・高山寺式系・相木式系などがあり、文様は山形文・楕円文・綾杉文・平行線文・格子目文がある。また異形押型文が注目される。その文様は、平行線・V字状文・連続菱日文・平行線組み合わせ文・綾杉状文・複合山形文・台形文などがある。異形押型文土器は、細久保式段階に伴うもので、特殊の文様のため、押型文土器文化の変遷・波及を知る指標とされている。

沈線文系土器では、三戸式・田戸下層式・田戸上層式などで、文様は三角文・平行文・弧状文・刺突文・細沈線文などがみられる。

条痕文系土器では、野島式系・鵜ヶ島台式・絡状体圧痕文系・茅山式系などである。

前期の関山式併行・有尾式（黒浜式）土器は、羽状縄文・結節のみられるものなどで胎土に繊維痕の有るものから無いものまである。

南大原式（諸磯a式）は肋骨文のみられる土器である。上原式（諸磯b式）には浅鉢型土器の破片があり、下島式（諸磯c式）は綾杉文・斜格子文・竹管文・条線文・集合条線文・貝殻状貼付文・細隆帯文・鋸切文などの土器である。さらに前期終末期段階の土器も少量検出されている。

縄文中期初頭の土器文化は、北信地方では判然と編年が確立されていないが、飯山市深沢遺跡、中野市姥ヶ沢遺跡などの再調査や、出土土器の分析によって可能になると思われる。それらから推察すると、関東系・北陸系の土器の影響がみられ、この地域の主体的な在地土器が把握できない状況である。本遺跡でも関東の五領ヶ台式系統の土器と、北陸からの影響の土器がみられる。

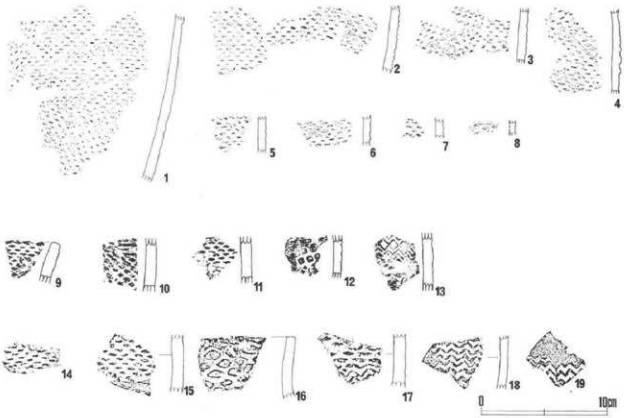
文様は土器の口縁部に斜行沈線文を描き、胴部は方形区画の隆帯があり、上に刻み目がつけられる土器などである。

中期中葉になると北陸の新崎式系・関東の阿玉台式系の影響をうけた土器が成立し、仮称深沢式と呼ばれる土器が出現する。この遺跡からは方形区画に縄文を施し、綾縁文のみられる土器や、縄文と竹管による格子状の文様の土器などである。

阿玉台式から影響をうけた、指痕文土器、北陸からの影響とみられる渦巻文の土器もある。

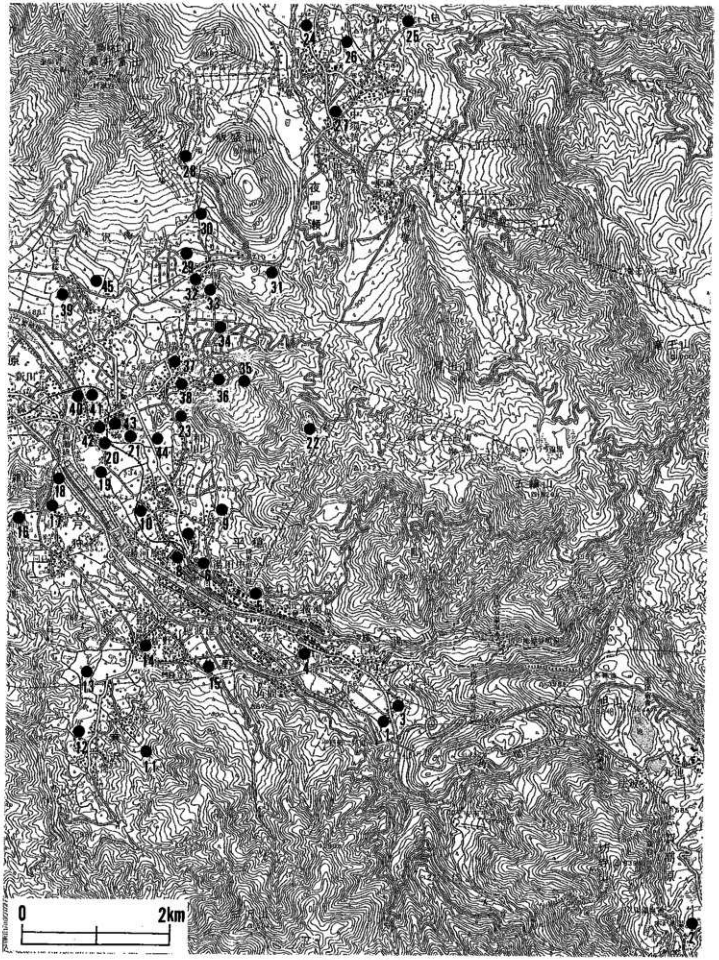
縄文後期前葉、堀之内2式の精製の深鉢土器もあり、搬入されたものとみられる。その後の晩期から弥生・古墳時代の土器は検出されていない。

石器は縄文早期では、剥片鏃・剥片石器・楔形鏃・横刃形石斧・小型石斧・特殊磨石などがある。前期では石匙・打製石斧があり、中期は石匙・打製石斧・凹石がある。後期では分銅形の打製石斧がある。この時期の石器の数量は僅かである（山ノ内教委『上林中道南遺跡Ⅲ』1996）。（椋原）



第３図　周辺遺跡出土押型文土器（上佐野遺跡１～８、下明神遺跡９～19）

遺跡遠景



第4図　周辺の遺跡

図版番号	遺跡名	旧石器	縄文						弥生		古墳			古代	備考（発掘調査・特記事項）
			草創期	早期	前期	中期	後期	晩期	中期	後期	前期	中期	後期		
1	上林中道南遺跡	○	○	○	○									○	
2	木戸池遺跡	○													石刃
3	十二沢遺跡				○										
4	島崎遺跡				○	○									
5	弥勒遺跡					○								○	
6	金毘羅遺跡														縄文時代　石棒
7	山ノ内中学校校庭遺跡													○	
8	三社遺跡				○										
9	吉沢遺跡					○									
10	上条的場遺跡				○										
11	円生里遺跡													○	縄文時代　石鏃、石匙
12	堀ノ内遺跡													○	縄文時代　打製石斧
13	富士宮遺跡														縄文時代　磨・打製石斧
14	佐野遺跡							○							昭和33年第１次調査
15	上佐野遺跡			○		○									
16	日影遺跡														縄文時代　磨・打製石斧
17	川原遺跡					○	○								
18	戸粋箱山遺跡									○					
19	四ツ屋遺跡					○									
20	上条境遺跡														縄文時代　磨製石斧
21	上条遺跡					○	○								昭和42・43年調査
22	北ノ窪遺跡														御子柴型石斧　単独出土
23	和田遺跡					○									
24	下明神遺跡			○	○										表採
25	八丁原遺跡													○	昭和35年調査
26	土橋遺跡					○									
27	中須賀川遺跡				○									○	
28	とおみ通し遺跡	○													
29	坂原遺跡			○	○										
30	北志賀よませスキー場遺跡	○													

表１　周辺の遺跡地名表(1)

図版番号	遺跡名	旧石器	縄文						弥生		古墳			古代		備考（発掘調査・特記事項）
			草創期	早期	前期	中期	後期	晩期	中期	後期	前期	中期	後期			
31	坪根遺跡					○										
32	上前坂遺跡			○	○	○			○							
33	前坂遺跡			○												
34	上野遺跡															縄文時代　磨・打製石斧、石匙、石鏃
35	矢崎遺跡															縄文時代　局部磨製石斧、打製石斧
36	横倉遺跡				○				○							
37	お屋敷遺跡													○	○	磨製石斧
38	天神森遺跡															縄文時代　磨製石斧、石棒、石鏃
39	宇木遺跡				○											有尾式土器、打製石斧、石匙、石鏃
40	町遺跡					○										酒場・諸磯式土器、抉入耳鉾、垂石、磨・打製石斧、局部磨製石斧、凹石、石鏃
41	町浦遺跡				○	○										有尾・南大原・上原・下島・阿玉台式土器、石棒、磨・打製石斧、石錐、凹石、石鏃
42	東町遺跡				○									○		土製耳飾、磨石
43	伊勢宮遺跡					○	○	○		○				○		昭和54年調査
44	雀崎遺跡							○								磨・打製石斧、石鏃、石棒
45	横前遺跡															縄文時代　有舌石槍、石鏃、石皿

表１　周辺の遺跡地名表(2)

引用・参考文献

『信州湯田中の弥勒石仏』 藤原良志 『信濃』12－３　1960

『信濃史料』第１巻　考古資料編 上・下　1956

『長野県史 考古資料編・遺跡地名表』 1981

『上条区史』 1994

第３章　遺構と遺物

第１節　遺構及び遺物の概要

調査は重機によって遺物検出面まで掘り下げ、遺構検出面からは手掘りで発掘調査を行った。

グリッド設定は任意の起点を設け４ｍグリッドを設置、南北に数字、東西にアルファベットを用いた。

上林中道南遺跡は旧石器時代・縄文時代早期から前期・古代・近世の遺跡である。

旧石器時代では一部に剥片素材を残す、エンド・スクレイパー１点が検出されている。

縄文時代では草創期後半から早期前半の表裏縄文土器片が１点、早期では押型文土器・回転系縄文土器・無文土器が検出されている。押型文土器は山形文・楕円文・平行線文さらに楕円文と平行線文が併用されている土器も検出されている。さらに少破片であるが、絡状体圧痕文土器１片が検出されている。

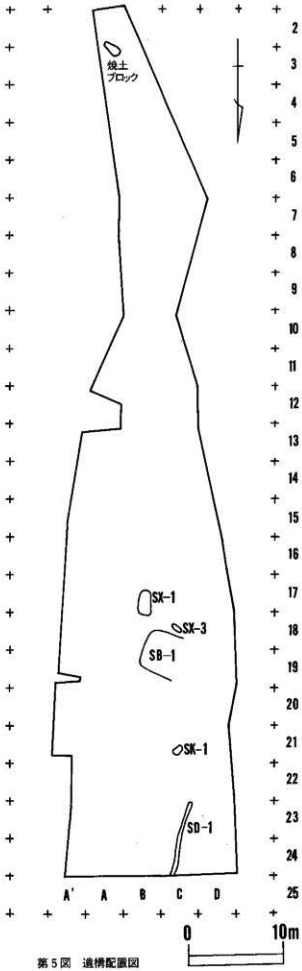
前期では終末期の諸磯ｃ式土器・十三菩提式土器などの櫛歯状条線文土器などが検出されている。中期は五領ヶ台併行期の土器、後期と思われる磨消縄文土器が検出されている。

石器は早期の糸巻型石器が１点、石匙１点、尖頭器２点、削器１点、抉入が入った異形石器３点、石鏃６点、石斧１点、敲石２点、石核とそれに伴う剥片６点などが検出されている。

遺構は縄文時代では焼土ブロック１基、土坑２基だけで他は確認されていない。

古代では、東南のコーナーにカマドがある住居址１軒が検出されている。他に溝状遺構１基、土坑１基が検出されている。遺物が含まれていないため時代は不明であるが、地層などから近世までは遡らないと思われる。

発掘調査面積は1,800㎡に及ぶが遺構が検出されたのは僅かであった。調査区の大部分が近世における開墾の削平及び竜宮川の氾濫・堆積・浸食の繰り返しで形成されたと思われ、遺構の確認は困難であった。　（竹田）



第５図　遺構配置図

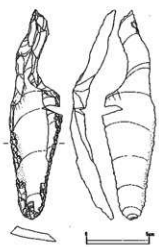
第2節　旧石器時代

1　石　器

削器（第6図）

1点A′－20グリッドから出土する。縦16.6cm、横4.2cm、器厚約0.5～1cmを測る、中央から2つに割れて出土した石器は玉髓製で石刃を素材とする。末端から中央部は素材剥片を多く残し、鶴の首の形状を呈している。大きく抉れた側辺部には、使用痕と思われる微細な剥離が認められる。末端は対向剥離による錐状を呈する。中央部より基部は片側辺に自然面を残し、対片側辺の中央から基部までは2次加工による刃部を作り出している。出土地点は20度ほどの斜面上で、出土した石器は末端部を斜面の上にして基部は約250cm離れ出土した。

（竹田）



第6図　旧石器時代の石器

第3節　縄文時代

1　遺　構

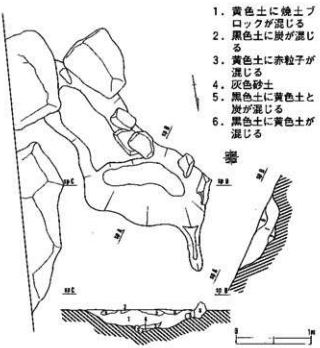
焼土ブロック（第7図）

A－2・3グリッドで検出された。長径が約340cm、短径が120cmの楕円形を呈する。焼土は明褐色で、焼土の度合いは低いように見える。覆土内遺物は検出されていないが、焼土ブロックの上層に楕円文土器片が検出されているため縄文時代の遺構とした。

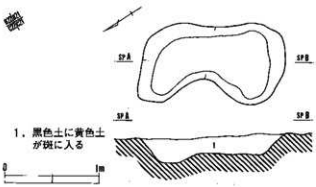
1号土坑（第8図）

C－21グリッドで検出された。平面形態は瓢箪形で長径約150cm、短径約80cm、深さ約25cmを測る。遺物は覆土内から正反な特殊撚り縄文が検出されている。

（竹田）



第7図　焼土ブロック



第8図　1号土坑

2　土　器

縄文草創期末の土器

第1類　表裏縄文土器（第9図）

1は1片の検出で口縁部の破片である。器厚は7mm前後で、堅緻な土器である。胎土に金雲母・石英などが含まれている。口縁部がやや外反する器形で、斜行する縄文が内外面に押捺され、口縁部にもみられるが、両面の施文後に上から押捺されている。既出の資料にもみられるタイプである。

縄文早期の土器

第2類　撚糸文土器（第9図）

13は胴下半部の破片で、カーブからみて直径10cmほどの土器と思われる。胎土に石英などがみられ、内面には炭化物の付着が認められる。5は胴

部の小破片で器厚は7.5㎜ほどで、石英などがある。4は胴下半部の破片と推定される。胎土に石英・金雲母・白色の岩石粒子が含まれる。器厚は6㎜内外で、内面は使用のためか、器面は不整である。表面は縦位の施文である。15・16は口縁部の破片で、口端が平行で直立する器形である。器厚は5㎜内外で微粒を含む、焼成良好な土器である。縦位施文で、胎土に白色岩石粒がみられ、胎土中は薄黒色で、やや脆弱な土器である。文様は斜行施文で粗い原体を使っている。3も同種である。2は胴部破片で器厚8㎜である。胎土は前記と同様だが精選されている。斜と縦位施文で、この破片は表面が平滑ではない。

第3類　縄文土器（第9図）

器厚が5～6㎜で、早期に属すると思われる土器の集成である。6は胴部破片で、胎土に白色粒を含み、左へ斜行（回転）する厳状縄文または、施文帯の下にループ状に縄文を押捺している。10は胴下半部の破片で、縄文縦位の施文で、胎土に白色粒・石英が含まれ、器厚は6㎜である。17・20は器厚5㎜内外で、胎土に白色粒が認められ、僅かに繊維痕が認められる。施文は左斜行縄文で、20には結節も認められる。

第4類　無文土器（第9図）

一般的には土器に文様がみられないものをいうが、検出例は破片のため、縄文早期に属すると思われるが決定的ではない。21・26・29は同体の土器である。口縁部が外反し、胴部の厚さは6㎜から口縁端では3.5㎜となる。口縁端部はやや外に傾き半円形である。胎土に石英粒、繊維痕が認められる。22は外面がやや平滑であるが、内面は凹凸のある工具で成形後ナデられている。器厚は7㎜ほどである。繊維痕・石英・砂などが胎土に認められる。

23・24・27・28・134は同体の土器である。器厚は4～7㎜ある。繊維痕・石英・砂粒が認められる。内面は成形痕を残し、炭化物が付着している。一般的には、早期の撚糸文土器と沈線文土器の間の土器といわれている。

第5類　押型文土器（第9～11図）

第1群　山形文（第11図）

3片（131～133）検出で、同一個体と思われる。器厚は7㎜前後である。胎土に石英や白色粒がみられるが精選され、堅い焼成である。内外ともに平滑である。口唇部は平行で施文されている。

山形文はゆるやかな波状を呈し（山の間の長さ9㎜）、施文原体の凹部の幅は3.5㎜ほどで、凸部は幅1.5㎜ほどである。文様帯と無文帯が横位にある。1984年出土土器にもみられる。

第2群　楕円文（第9～11図）

楕円文様を並列した文様である。個体、文様、施文などの特徴により、個別に記す。

32～65・68は同一の個体で、出土位置も近く周辺である。胴部がやや膨らみ、口縁部が少し外反する器形と推定される。口唇部は半円形に近く、口径は17cm前後と推定され、器厚は8㎜前後である。胎土には雲母のほか、石英などの多くの砂粒が含まれ、焼成は良好で、内面もよく整えられている。施文原体（棒状工具）の長さは3.7cmで、楕円文の長さは7㎜、幅4㎜ほどである。全面密に横方向に施文されているとみられる。

67は胎土に砂粒が認められない土器で、器厚は7㎜である。原体の楕円文は長さ7.5㎜、幅3㎜で細長い。

40・66は底部に近い破片で器厚は8㎜前後である。楕円文は長さ6㎜、幅3㎜である。繊維痕と胎土に石の微粒が認められる。

69～114はBブロックの集中箇所から検出された。この楕円文土器は胎土などに違いがみられるが、同じ時期に属する可能性が大きい。76・83・91は口縁部である。口唇部は半円形を呈するが、口縁部は肥厚し、外面が二重口縁状になった箇所もある。そして口縁部の成形が不完全で、波状を呈している。器厚も一定せず6～9㎜の間にある。胎土には石英や白色粒があり、繊維痕がかなり顕著にみられる焼成の軟らかい土器である。

81の楕円文土器を除いて、ほかの土器片は楕円文の施文方向が一定せず、器面の調整を主目的として施文具が使用されたか、と思われる。

胎土からみると絡状体圧痕文土器に近く、後出

的で高山寺式系に属すると思われる。

第３群　平行線押型文（第11図）

丸棒に縦状に刻みをつけて器面に回転施文した土器である。117～128・129・140の土器片である。126は平行線文と楕円文の併用文様の土器で、胎土焼成も同様である。120は器厚８㎜前後で、胎土に白色粒・鉄分粒・石英などを含み、含まれた繊維も太い部分があり、痕跡が器面に現れている。文様の凹部の幅は2.5㎜、凸部の幅1.5㎜ほどで、施文具の長さは約３㎝と推定される。出土位置は楕円文土器と同様で、先にみたように属性は同じで、使用された時期も同一と思われる。この土器は東北地方の日計式土器との関係で注目される。

第６類　沈線文系土器群・田戸下層式系土器（第11図）

139～142・146～151・154・155・266・287は出土位置がややずれているが、同一個体と認められる胴部の破片である。器厚は８㎜で均一である。胎土に石英・白色粒・雲母などを含んで、繊維痕も認められる。139は幅８㎜の４本の櫛歯状工具で、横走と、左傾に沈線の施文をしている。

142は横走の沈線と右傾縄文の土器片で、266は同種の縄文のみの土器である。

第７類　条痕文系土器（第11・12図）

鵜ヶ島台式土器　137は器厚５～７㎜で、口唇部は丸く、やや波状を呈した口縁である。器面の一部分が剥脱しているが細い沈線で斜格子文を描いている。胎土に繊維痕があり、内面は平滑である。159は器厚６㎜内外で、細い平行線で、斜状や横走に描いている。胎土に砂粒の多い土器である。135は器厚６㎜内外で、繊維痕は僅かである。外面は細沈線で縦横に描いている。内面は整形痕（条痕）が残されている。

138は器厚６㎜内外で、胎土に繊維痕・白色粒がみられる。文様は細沈線で斜状（幾何学文）に３条など描き、上下に円形棒状工具で刺突させている。136は前者と同体である。

同種土器は1985年の調査時に、コの字形石囲み炉址の周辺から主体的に検出された土器である。

第８類　特殊撚りの縄文土器（第13図）

特殊な撚りによる回転系縄文土器206は底部付近の破片で、胎土に白色粒などあり、器厚は６㎜で底部近くが９㎜である。内面は黒く、外面に縄文がみられる。202～205・208～212は同体の土器と推定される。口唇部は内傾して丸く、器厚は９～10㎜で、白色粒、繊維痕が顕著である。内面はほぼ平滑である。左傾その他に縄文を全面密施し、口端部は施文後に整えられている。

第９類　凸帯文土器（系統不明）（第13図）

217は口端部が平で肥厚外反し、胴部上に凸帯を巡らし、上に斜めに太い沈線で刻みを巡らせた土器である。器厚は６～15㎜ほどある。胎土に白色粒・繊維もみられる。同種の土器破片がほかに一つある。

縄文時代前期の土器

第10類　絡状体圧痕文土器（第９図）

11は小破片１点である。胎土は施く繊維痕があり、原体の押圧が僅かにみられる。

第11類　縄文土器（第14・15図）

縄文前期に属すると思われる集成である。結節があって同一方向に縄文が押捺される土器である。239は左傾単節縄文で胎土に白色粒・繊維痕がみられ、器厚は６㎜である。257・265は右傾単節縄文で、縦繰り状の結節がある。胎土に白色粒・繊維痕があり、器厚は７～８㎜である。267は羽状に縄文が押捺されるが結節がみられないもので、器厚７㎜で胎土に砂粒（石英など）・繊維痕があり、内面は平滑である。これらの土器は早期的色彩の濃いものである。

第12類　羽状縄文土器（第12・14・15図）

結節の羽状縄文を全面に押捺された土器である。197・236～249・251～256・258～261・263・264・267～269・271・274・279・280は同種の土器である。器厚は９～10㎜で、胎土に白色粒、繊維痕が顕著である。内面は平滑である。242には方向をかえて押捺され、四角（菱形）の施文となっている。同一時期に伴出する土器に、他の文様の土器がみられないが、関山式（南大原式）～黒浜式（有尾式）併行土器と思われる。

第13類　諸磯ｃ式（下島式）併行土器（第15図）

縄文前期終末期段階の平行条線・浮線文・結節状浮線文・竹管文などの土器である。

294・295は口縁部の破片で、器厚5㎜前後で口端は丸く内折している。294は竹管の円形文から右と斜め下に2条のC字（文）の竹管文を施している。325・295は縄文地文の上に竹管文が施されている。胎土に白色粒があり、内面は平滑である。290・291は同体の土器である。器厚は6㎜前後で、内面は平滑である。横走する条線に縦に盛り上がった竹管文（結節状）を施している。293は口縁部の破片である。口端部は外面に傾斜して丸く、竹管C字文の下に平行する隆帯をつくり、上に縄状の文様を押捺している。

その他は縦の条線301・302と、横の条線300、集合条線304などである。

288・289の土器は同体または、同種の土器である。288の土器は胎土に白色粒・砂粒を含み、内面は平滑である。器厚は6～10㎜である。文様は左傾する縄文地文上に間隔のある竹管C字文を施している。口端部に加飾があり、粘土紐で平行・直交に肥厚させている。その上に縄文押捺、刻みを施している。289は縄文地文に竹管C字文がある。口端部は粘土紐で2本が直交し、C字状の肥厚が盛り上がっている。これらの加飾は、縄みカゴなどの装飾からきた文様とも想定される。

第14類　十三菩提式土器（第13・14図）

1個体と思われる土器が検出されている。230～232・234・235（その他、破片多数）である。器厚は8㎜ほどで、白色粒が多くみられ、内面はほぼ平滑である。

器形は直線的に開くとみられるが、頂部が肥厚して口端部が凹みをもつ波状口縁を呈するとみられる。234の口端部は内面に丸く、3単位の櫛歯状工具で上部は平行に下は波状などに描き、三角・楕円の空白部もある。これらの中程に横走の櫛歯平行文を入れ、その下部は縄文地文に前記の文様を描き、下半部分は左傾の単節縄文のみとなるとみられる。この土器の外面には、炭化物が多く付着している。

縄文中期の土器

第15類　五領ヶ台式併行土器（第16図）

5破片ほどである。313は口縁部の破片でゆるく「くの字状」に外反した器形で、器厚は9㎜で内面平滑、焼成は堅く、白色粒・砂粒がみられる。口端部は丸く外反している。文様は平行に半截竹管で上下交互に削り取り、1条ごとに波状文をつくっている。また胴部の方形区画の上には突起がみられるようである。309～312は胴部の破片で、縄文地文の上に半截竹管で方形区画を描き、角隅部の内部を三角形に沈刻している。

310は胎土に白色粒・石英（水晶）などを含む堅い土器で、器厚は10㎜前後である。器面に突起などの加飾があるが、詳細は不明である。その中に竹管による曲線がみられる。315も同種土器で平行・斜行文に円形文のみられるものである。

縄文後期の土器

第16類　磨消縄文土器（第16図）

322は器厚7㎜で、胎土に白色粒・石英などを含む明褐色の土器である。縄文地文を太い沈線で擦り消している。越後方面からの影響の土器とみられるが、確定できない。321の土器は無文の口縁部破片で、所属時期の不明の土器である。しかし胎土・焼成・色調は322の土器と同じである。口縁部が外反した器形で、口端部が内外に肥厚し、断面がT字状となっている。

第17類　所属時期不明の土器（第16図）

320は器厚が10㎜前後、脆い焼成で、胎土に鉄分粒などを含み粗製である。口端部は丸または外反して平である。内面はやや平滑であるが、外面は粗く、三角状の隆帯が付着され、曲線を描いている。（檀原）

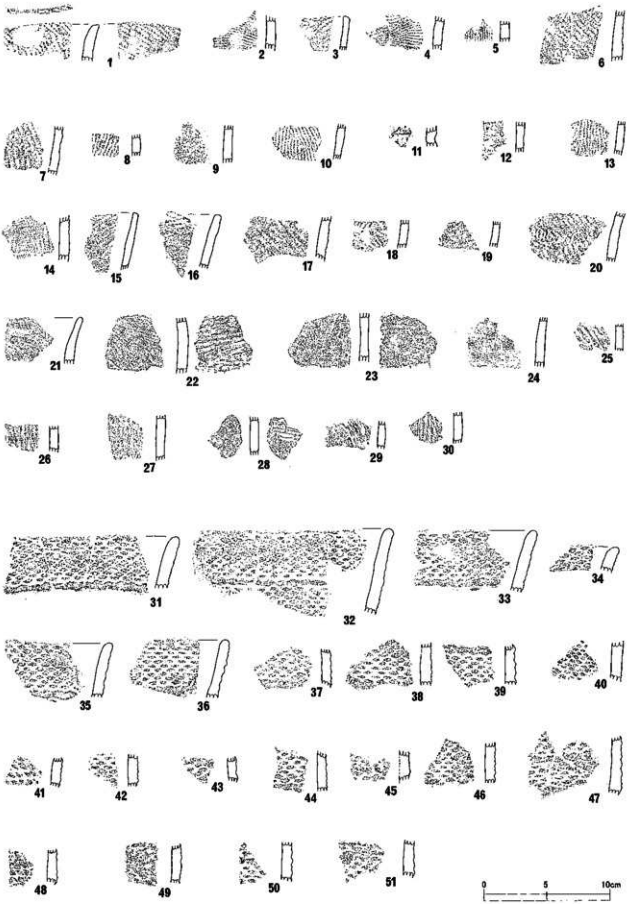
3　石　器

糸巻形石器（第18図13）

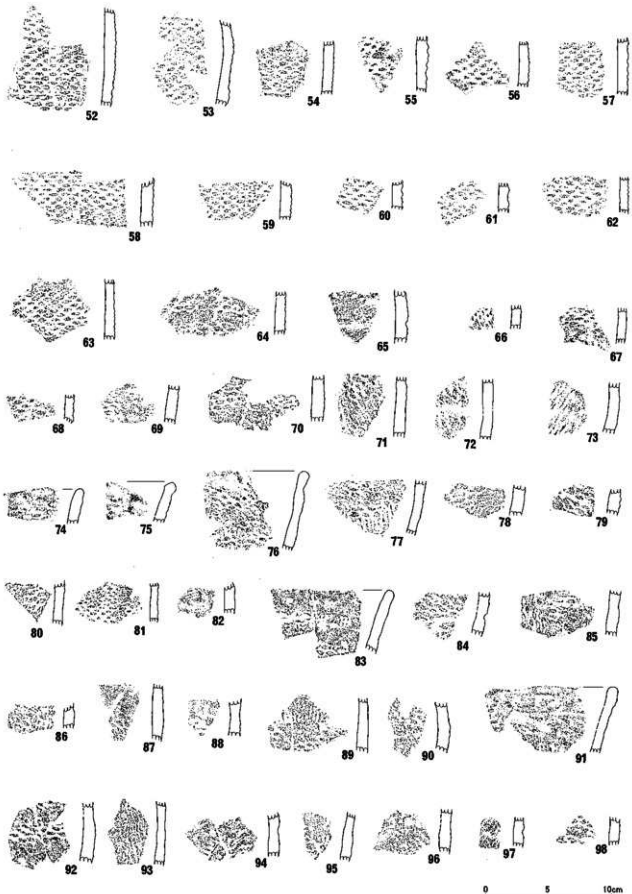
1点が出土、石質は鉄石英で長径約2.5㎝、短径1.8㎝、器厚約0.5㎝を測る。4個辺部に対称均一に抉りが入り、糸巻形を成す。縁辺部全体に調整加工が施される。

石核（第17図〈模式図〉・第18図3）

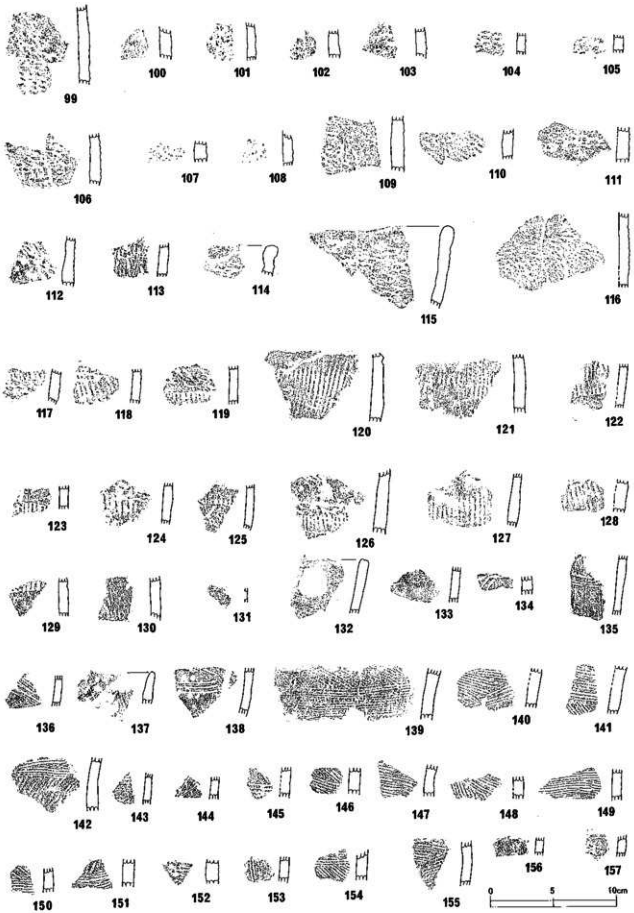
1点がA－2グリッドから出土。石核から斜面



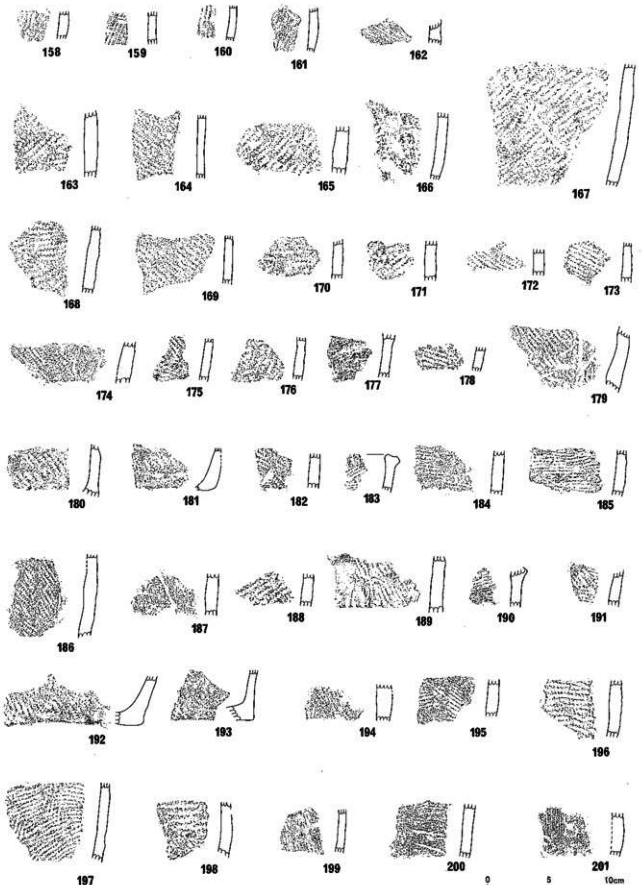
第9図　グリッド出土の縄文土器(1)



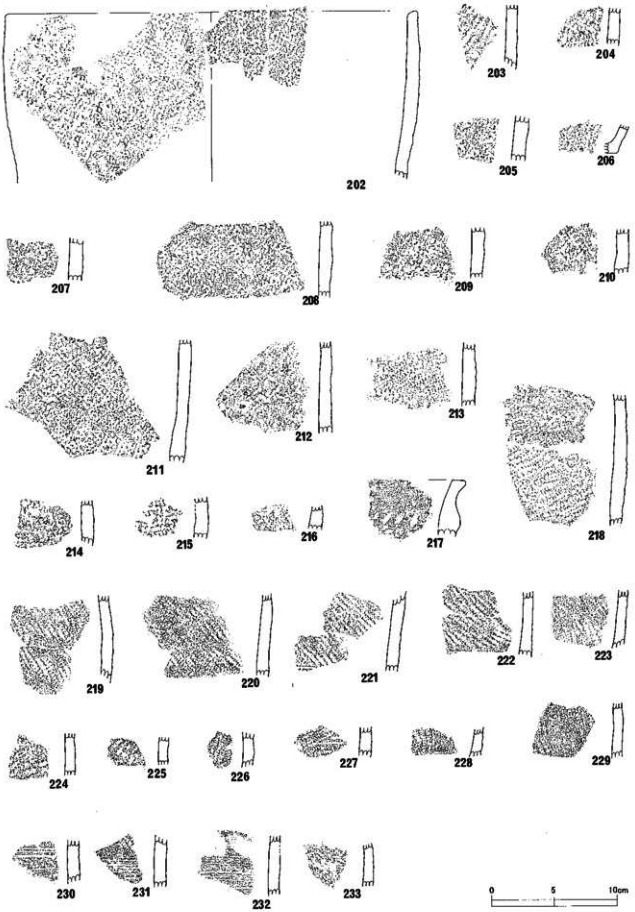
第10図　グリッド出土の縄文土器(2)



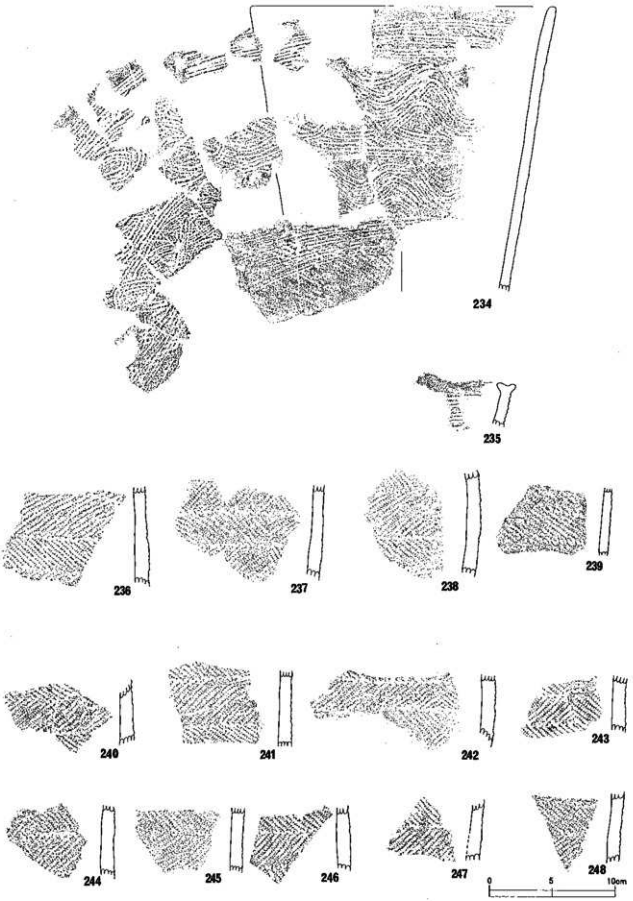
第11図　グリッド出土の縄文土器(3)



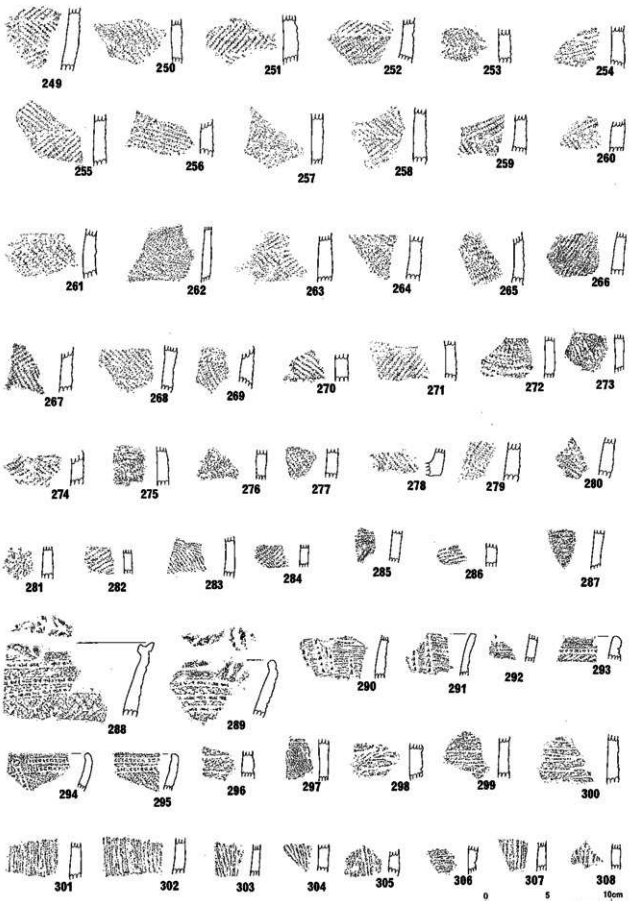
第12図　グリッド出土の縄文土器(4)



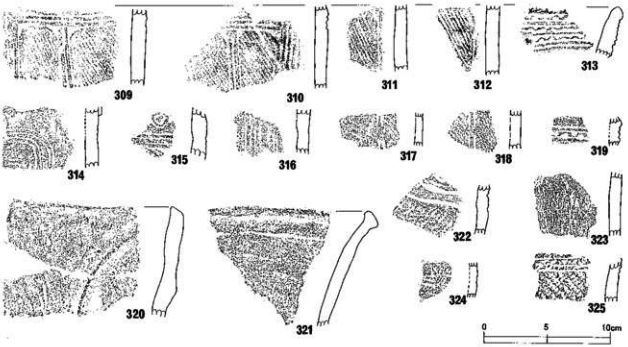
第13図　グリッド出土の縄文土器(5)



第14図　グリッド出土の縄文土器(6)



第15図　グリッド出土の縄文土器(7)



第16図　グリッド出土の縄文土器(8)

下方約３ｍ範囲にフレークが６点、散在して出土する。岩質は、石核とフレークは同質の赤色チャート（鉄石英）で、石器工作時の石核と残石片と思われる。

打製石斧（第18図４）

１点出土、長径約10cm、短径約６cm、器厚約２cmを測り、刃部近くに最大幅をもち、自然面が刃部の約半分に残る。

尖頭器（第18図５・12）

２点出土、11は横長剥片で長径5.7cm、短径2.2cmを測り細身柳葉状を呈する。最大幅を中央より基部よりにもち、尖頭部がくちばし状に加工されている。３は長径約８cm、短径約４cm、器厚0.7cmを測り、尖頭部は欠損している。基部に黒色の付着物が残る。材質は安山岩で縦長剥片を素材としている。

敲石（第18図１・２）

２点出土、１は長径が約20cm、短径約７cmを測る四角柱形を成す。両尖端部に使用痕が残る。１面は特殊磨石として使用される。２は長径約16cm、短径約5.5cmを測る三角柱形を成す。凹石の機能を併せ持つと思われ、一面に長さ約７cmにわたって凹痕が８箇所一列に残る。

削器（第18図11）

１点が出土、横長剥片で、長径約3.5cm、短径約5.5cm、器厚0.8cmを測る楕円形を成し、周縁部に刃部の作出とみられる調整が施されている。一部欠損している。

扶入石器（第18図５～７）

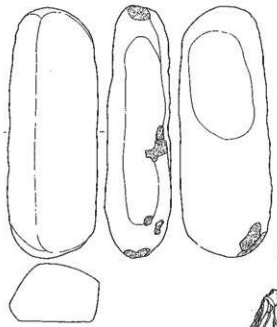
３点出土し、３点とも同質の安山岩である。５は縦長剥片で長径5.5cm、短径５cm、器厚約1.3cmを測り、約１cmの抉りが１箇所入る。６は縦長剥片で長径7.8cm、短径約4.5cmを測り、大小の抉りが４箇所に入る。抉り部に調整加工を施してある。その他の側辺は剥片素材縁を残している。７は長径約８cm、短径約6.5cm、器厚約1.5cmを測る。約２cmの抉りを１箇所施し、抉り部に調整加工を施してある。その他の側縁部に素材剥片刃部を残す。

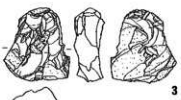
石匙（第18図10）

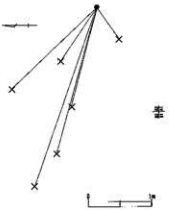
１点がD－13グリッドから出土する。安山岩製の縦型石匙で長径約７cm、短径約4.5cm、器厚0.9cmを測る。横長剥片の片側縁に素材剥片の縁を残し、片側縁全体に調整加工を施している。

石鏃（第18図13～19）

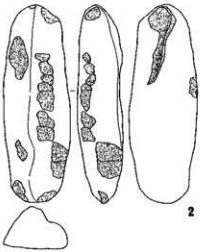
有茎鏃１点（16）、無茎鏃５点（13・15・17～19）出土する。無茎鏃１点は一部を欠損している。

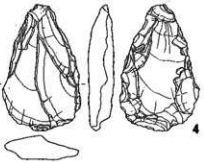


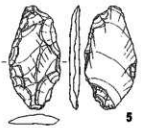


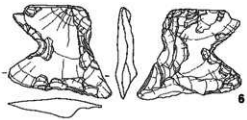


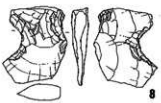
第17図　石器出土状況
（模式図）

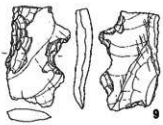


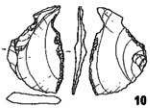


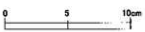












第18図　グリッド出土の縄文石器

図版番号	図No.	実測番号	グリッド名	文様	部位	胎土	繊維痕	色調	焼成	備考
1	1	253	A－13	縄文	口縁部	金雲母		黒褐	堅い	表裏縄文
1	2	249	B－18	撚糸文	胴部	白色粒		褐	堅い	原体細い
1	3	296	C－21	撚糸文	胴上部	白色粒		暗褐	堅い	検出・器厚薄い
1	4	252	B－17	撚糸文	胴下部	白色粒		暗褐	堅い	
1	5	251	C－22	撚糸文	胴下部			鈍い褐	堅い	
1	6	13	D－21	縄文	胴部	白色粒	少	褐	堅い	
1	7	161	C－21	縄文	胴部	白色粒		褐	堅い	検出
1	8	244	A－19	縄文	胴部			赤褐	堅い	
1	9	293	D－22	縄文	胴部	白色粒		暗褐	脆弱	
1	10	250	A－19	縄文	胴部			明褐	堅い	
1	11	301	C－19	絡条体圧痕文	胴部		少	明赤褐	やや脆弱	
1	12	242		縄文	胴部	白色粒		赤褐	やや脆弱	検出
1	13	247	B－24	撚糸文	胴部	石英粒		橙	やや脆弱	
1	14	29	C－9	縄文	胴部	石英粒少	少	暗赤褐	堅い	
1	15	289	C－21	撚糸文	口縁部	白色粒	少	褐	やや脆弱	
1	16	162	C－21	撚糸文	口縁部	白色粒	少	褐	やや脆弱	土坑1・15と同体
1	17	157	C－21	縄文	胴部	白色粒	少	鈍い赤褐	堅い	土坑1
1	18	246	C－15	縄文	胴部	白色粒	少	灰褐	やや脆弱	
1	19	297	D－22	縄文	胴部	白色粒	少	赤褐	やや脆弱	
1	20	160	C－21	縄文	胴部	白色粒		明赤褐	堅い	
1	21	147	A－3	無文	口縁部		少	明赤褐	堅い	
1	22	228	A－3	無文	胴部	石英粒少	少	明赤褐	堅い	内面横成形痕
1	23	229	A－2	無文	胴部	砂粒	少	明赤褐	堅い	
1	24	233	A－3	無文	胴部	石英粒	少	鈍い赤褐	堅い	
1	25	156	A－3	斜沈線文	胴部		少	赤褐	堅い	
1	26	148	A－3	縦沈線文	胴部		少	赤褐	堅い	
1	27	267	A－3	無文	胴部		少	赤褐	堅い	
1	28	230	A－3	無文	胴部		少	赤褐	堅い	
1	29	149	A－3	無文	胴部		微	赤褐	堅い	
1	30	153	A－3	無文	胴部		少	赤褐	堅い	
1	31	133	B－13	楕円文	口縁部	石英粒多	極微量	暗赤褐	堅い	

表2　縄文時代土器属性表(1)

図版番号	図No.	実測番号	グリッド名	文様	部位	胎土	繊維痕	色調	焼成	備考
1	32	134	B－13	楕円文	口縁部	石英粒多	極微量	極暗赤褐	堅い	
1	33	122	B－13	楕円文	口縁部	石英粒多	極微量	極暗赤褐	堅い	
1	34	109	B－13	楕円文	口縁部	石英粒多	極微量	極暗赤褐	堅い	
1	35	112	D－13	楕円文	口縁部	石英粒多	極微量	極暗赤褐		
1	36	113	B－13	楕円文	口縁部	石英粒多	極微量	極暗赤褐		
1	37	114	B－13	楕円文	胴部	石英粒多	極微量	赤褐	堅い	
1	38	115	B－13	楕円文	胴部	石英粒多	極微量	鈍い赤褐	堅い	
1	39	117	B－13	楕円文	胴部	石英粒多	極微量	赤褐	堅い	
1	40	226	B－18	楕円文	胴下部		少	赤褐	堅い	
1	41	105	B－13	楕円文	胴部	石英粒	少	明赤褐	堅い	
1	42	108	B－13	楕円文	胴部	石英粒	少	明赤褐	堅い	41と同体
1	43	104	B－13	楕円文	胴部	石英粒	少	鈍い赤褐	堅い	
1	44	120	B－13	楕円文	胴部	石英粒	少	赤褐	堅い	
1	45	310	B－13	楕円文	胴部	石英粒	少	明赤褐	堅い	
1	46	103	B－13	楕円文	胴上部	石英粒	少	鈍い赤褐	堅い	
1	47	124	B－13	楕円文	胴部	石英粒	少	鈍い赤褐	堅い	
1	48	106	A－14	楕円文	胴部	石英粒	少	鈍い赤褐	堅い	
1	49	107	A－14	楕円文	胴部	石英粒	少	鈍い赤褐	堅い	文様が不明確
1	50	110	B－13	楕円文	胴部	石英粒	少	鈍い赤褐	堅い	
1	51	116	B－13	楕円文	胴部	石英粒	少	明赤褐	堅い	輪積痕
2	52	132	B－13	楕円文	胴部	石英粒多	少	赤褐	堅い	
2	53	129	B－12	楕円文	胴部	石英粒	少	明赤褐	堅い	
2	54	111	B－13	楕円文	胴部	石英粒	少	明赤褐	堅い	
2	55	121	A－14	楕円文	胴部	石英粒	少	明赤褐	堅い	
2	56	127	B－13	楕円文	胴下部	石英粒	少	明赤褐	堅い	
2	57	102	B－13	楕円文	胴部	石英粒	少	明赤褐	堅い	
2	58	135	B－13	楕円文	胴部	石英粒	少	明赤褐	堅い	
2	59	128	B－13	楕円文	胴部	石英粒	少	明赤褐	堅い	
2	60	125	B－13	楕円文	胴部	石英粒	少	鈍い赤褐	堅い	
2	61	118	B－13	楕円文	胴部	石英粒少	少	鈍い赤褐	堅い	
2	62	126	B－13	楕円文	胴部	石英粒少	少	鈍い赤褐	堅い	61と同体
2	63	130	B－13	楕円文	胴部	石英粒少	少	鈍い赤褐	堅い	61と同体

表2　縄文時代土器属性表(2)

図版番号	図No.	実測番号	グリッド名	文様	部位	胎土	繊維痕	色調	焼成	備考
2	64	131	B－13	楕円文	胴部	石英粒少	少	鈍い赤褐	堅い	61と同体
2	65	327	A－14	楕円文	胴部	石英粒 白色粒	多	灰褐	脆弱	
2	66	227	B－16	楕円文	胴部		少	鈍い赤褐	堅い	
2	67	225	C－22	楕円文	胴部		少	明赤褐	堅い	横長楕円文
2	68	123	B－13	楕円文	胴部	石英粒	少	明赤褐	堅い	
2	69	168	B－17	楕円文	胴部	白色粒	少	鈍い赤褐	堅い	文様が不明確
2	70	164	B－17	楕円文	胴部	白色粒	少	褐灰	堅い	文様が不明確
2	71	165	B－17	楕円文	胴部	白色粒	少	赤褐	堅い	
2	72	172	B－17	楕円文	胴部	白色粒	少	明赤褐	堅い	
2	73	167	B－17	楕円文	胴部	白色粒	少	明赤褐	堅い	文様が不明確
2	74	169	B－17	楕円文	口縁部	白色粒	少	明赤褐	堅い	文様が不明確
2	75	170	B－17	楕円文	口縁部	白色粒	少	明赤褐	堅い	74と同体
2	76	175	B－17	楕円文	口縁部	石英粒	中	鈍い赤褐	堅い	文様が不規則
2	77	166	C－17	楕円文 平行線文	胴部	石英粒	少	明赤褐	堅い	文様が併用
2	78	178	B－17	楕円文	胴部	石英粒	少	明赤褐	堅い	
2	79	174	B－17	楕円文	胴部		少	明赤褐	堅い	
2	80	177	B－17	楕円文	胴部	石英粒	少	明赤褐	堅い	
2	81	190	C－17	楕円文	胴部	白色粒	少	橙	堅い	
2	82	173	C－17	平行線文	胴部	白色粒	少	明赤褐	やや脆弱	
2	83	179	C－17	山形文 楕円文	口縁部	石英粒少	少	鈍い赤褐	堅い	文様が併用
2	84	184	B－17	楕円文	胴部	石英粒	多	明赤褐	やや脆弱	
2	85	176	B－17	楕円文	胴部	石英粒少	少	明赤褐	堅い	楕円文縦・横位
2	86	179	B－17	楕円文	胴部	石英粒少	少	明赤褐	堅い	85と同体
2	87	180	C－17	楕円文	胴部	石英粒少	多	明赤褐	堅い	無文が併用
2	88	181	C－17	楕円文	胴部	石英粒少	多	明赤褐	堅い	87と同体
2	89	183	B－17	楕円文 平行線文	胴部	石英粒少	少	明赤褐	堅い	無文が併用
2	90	186	B－17	楕円文	胴部	石英粒少	少	明赤褐	やや脆弱	外面剥落
2	91	163	B－17	平行線文	口縁部	石英粒少	少	鈍い赤褐	堅い	外面剥落
2	92	185	B－17	楕円文	胴部	白色粒	多	橙	やや脆弱	
2	93	187	B－17	楕円文	胴部	石英粒	少	明赤褐	堅い	平行線が併用

表2　縄文時代土器属性表(3)

図版番号	図No.	実測番号	グリッド名	文様	部位	胎土	繊維痕	色調	焼成	備考
2	94	189	C－17	楕円文 平行線文	胴部	白色粒	少	明赤褐	堅い	
2	95	193	C－17	楕円文	胴部	白色粒	少	明赤褐	堅い	
2	96	194	B－17	楕円文	胴部	白色粒	少	明赤褐	堅い	
2	97	197	B－17	平行線文	胴部	白色粒	少	明赤褐	やや脆弱	
2	98	192	B－17	楕円文	胴部	白色粒	少	明赤褐	堅い	
3	99	191	B－17	楕円文	胴部	白色粒	少	橙	堅い	
3	100	203	C－17	平行線文	胴部	白色粒	少	橙	堅い	
3	101	195	B－17	平行線文	胴部	白色粒	少	明赤褐	やや脆弱	
3	102	200	B－17	楕円文	胴部		少	明赤褐	やや脆弱	
3	103	199	B－17	楕円文	胴部	白色粒	少	明赤褐	堅い	
3	104	202	C－18	楕円文	胴部	石英粒少	少	明赤褐	堅い	
3	105	204	B－17	楕円文	胴部		少	明赤褐	堅い	
3	106	198	B－17	楕円文	胴部	白色粒	多	明赤褐	堅い	併用文が不明確
3	107	205	B－17	楕円文	胴部	白色粒	多	明赤褐	堅い	
3	108	206	B－17	楕円文	胴部	白色粒	少	明赤褐	堅い	
3	109	208	B－17	楕円文	胴部	石英粒	多	明赤褐	堅い	
3	110	220	B－17	楕円文	胴部	白色粒	少	橙	やや脆弱	
3	111	209	C－17	楕円文	胴部	白色粒	多	明赤褐	やや脆弱	
3	112	210	C－17	楕円文	胴上部	石英粒少	少	鈍い赤褐	堅い	
3	113	151	C－13	楕円文	胴部		多	赤褐	堅い	無文が併用
3	114	212	B－17	楕円文	口縁部	石英粒少	少	鈍い橙	堅い	
3	115	207	B－17	楕円文	口縁部	石英粒少	少	鈍い赤褐	堅い	
3	116	211	C－17	楕円文	胴部	石英粒少	少	明赤褐	堅い	
3	117	182	B－17	楕円文 平行線文	胴部	石英粒少	少	明赤褐	堅い	文様が併用
3	118	187	B－17	楕円文 平行線文	胴部	石英粒少	少	明赤褐	堅い	文様が併用
3	119	140	B－17	楕円文 平行線文	胴部	石英粒少	少	明赤褐	堅い	
3	120	142	C－17	平行線文	胴部	石英粒少	多	明赤褐	堅い	
3	121	138	B－17	平行線文	胴部	石英粒少	少	明赤褐	堅い	
3	122	145	C－17	平行線文	胴部	石英粒少 鉄分少	少	明赤褐	堅い	無文が併用

表2　縄文時代土器属性表(4)

図版番号	図No.	実測番号	グリッド名	文様	部位	胎土	繊維痕	色調	焼成	備考
3	123	143	C－17	平行線文	胴部	石英粒少	少	明赤褐	堅い	
3	124	146	B－17	平行線文	胴部	石英粒少 鉄分粒少	少	赤褐	堅い	
3	125	141	B－17	平行線文	胴部	石英粒少	少	明赤褐	堅い	無文が併用
3	126	137	B－17	平行線文 梅円文	胴部	石英粒少 鉄分粒少	少	明赤褐	堅い	文様が併用
3	127	136	B－17	平行線文	胴部	石英粒少	少	明赤褐	堅い	外面剥落
3	128	144	B－17	平行線文	胴部	白色粒少	少	明赤褐	堅い	
3	129	196	B－17	平行線文	胴部	白色粒少	少	鈍い赤褐	堅い	無文が併用
3	130	139	B－17	平行線文	胴部		少	鈍い赤褐	堅い	
3	131	224	A－24	山形文	胴部		少	暗赤褐	堅い	トレンチNo.4
3	132	221	A－5	山形文	口縁部	石英粒少	少	暗赤褐	堅い	口唇部施文・外面剥落
3	133	222	A－3	山形文	胴部	石英粒少	少	鈍い赤褐	堅い	302と同体
3	134	234	A－24	沈線文	胴部	白色粒少	少	鈍い赤褐	堅い	
3	135	232	B－13	沈線文	胴部	白色粒少	少	鈍い赤褐	堅い	
3	136	237	B－11	沈線文	胴部	白色粒少	少	鈍い赤褐	堅い	138と同体
3	137	223	D－13	菱文	口縁部		少	鈍い赤褐	堅い	縄ヶ島台式・外面剥落
3	138	236	B－11	沈線文 突刺文	胴部	白色粒少	少	鈍い赤褐	堅い	136と同体・文様が併用
3	139	214	D－15	条痕文	胴部	石英粒少 白色粒少	少	鈍い赤褐	堅い	
3	140	329	C－15	条痕文	胴部	石英粒少 白色粒少	少	鈍い赤褐	堅い	139と同体
3	141	330	D－15	条痕文	胴部	石英粒少 白色粒少	少	鈍い赤褐	堅い	139と同体
3	142	328	D－15	条痕文	胴部	石英粒少 白色粒少	少	鈍い赤褐	堅い	139と同体
3	143	100		条痕文	胴部	白色粒	少	鈍い赤褐	堅い	トレンチNo.4
3	144	235		条痕文	胴部		少	鈍い赤褐	堅い	トレンチNo.4
3	145	286	A－15	条痕文	胴部	白色粒	少	鈍い赤褐	堅い	
3	146	335	D－15	条痕文	胴部	白色粒	少	鈍い赤褐	堅い	
3	147	336	D－13	条痕文	胴部	白色粒	少	鈍い赤褐	堅い	146と同体
3	148	339	D－15	条痕文	胴部	白色粒	少	鈍い赤褐	堅い	146と同体
3	149	331	D－15	条痕文	胴部	石英粒少 白色粒少	少	鈍い赤褐	堅い	139と同体

表2　縄文時代土器属性表(5)

図版番号	図No.	実測番号	グリッド名	文様	部位	胎土	繊維痕	色調	焼成	備考
3	150	337	B－16	条痕文	胴部	石英粒小 白色粒小	少	鈍い赤褐	堅い	139と同体
3	151	333	D－15	条痕文	胴部	石英粒小 白色粒小	少	明赤褐	堅い	139と同体
3	152	201	C－19	条痕文	胴部	石英粒小 白色粒小	少	赤褐	堅い	139と同体・外面剥落
3	153	238	C－12	条痕文	胴部	石英粒小 白色粒小	少	赤褐	堅い	139と同体
3	154	340	D－15	条痕文	胴部	石英粒小 白色粒小	少	赤褐	堅い	139と同体
3	155	213	C－16	条痕文	胴部	石英粒少 白色粒少	少	赤褐	堅い	
3	156	154	A－4	条痕文	胴部		少	赤褐	やや脆弱	
3	157	287	B－9	条痕文	胴部		少	褐	やや脆弱	
4	158	152	C－13	条痕文	底部		少	鈍い赤褐	やや脆弱	
4	159	231	A－15	条痕文	胴部	白色粒	少	暗褐	堅い	
4	160	155	C－13	条痕文	底部		少	赤褐	堅い	158と同体
4	161	150	C－13	条痕文	胴部		少	赤褐	堅い	158と同体
4	162	101	C－23	条痕文	胴部		少	赤褐	やや脆弱	
4	163	53	A－5	縄文	胴部	石英粒	少	橙	堅い	
4	164	68	D－22	縄文	胴部	石英粒少	少	赤褐	堅い	
4	165	58	A－5	縄文	胴部	石英粒	少	橙	堅い	163と同体
4	166	64	A－5	縄文	胴下部	石英粒	少	橙	堅い	163と同体
4	167	82	A－5	縄文	胴部	石英粒	多	橙	堅い	163と同体
4	168	51	D－22	縄文	胴部	白色粒少	少	明赤褐	堅い	
4	169	75	D－21	縄文	胴部	白色粒	少	橙	堅い	
4	170	57	D－21	縄文	胴部	白色粒	少	明赤褐	堅い	
4	171	73	D－22	縄文	胴部	白色粒	少	明赤褐	やや脆弱	結節
4	172	66	C－13	縄文	胴部	白色粒	少	鈍い褐	やや脆弱	
4	173	54	C－8	縄文	胴部		少	鈍い橙	やや脆弱	
4	174	259	C－17	縄文	胴部		極微量	鈍い橙	堅い	細沈線文が併用
4	175	56	C－8	縄文	胴部		少	鈍い赤褐	堅い	結節がある
4	176	69	D－22	縄文	胴部		少	明赤褐	やや脆弱	
4	177	304	C－17	縄文	胴下部		少	橙	やや脆弱	
4	178	55	D－21	縄文	胴部	白色粒	少	橙	やや脆弱	

表2　縄文時代土器属性表(6)

図版番号	図No	実測番号	グリッド名	文様	部位	胎土	繊維痕	色調	焼成	備考
4	179	273	C－17	縄文	胴部		極少量	橙	堅い	細沈線文が併用・174と同体
4	180	76	B－4	縄文	胴下部			鈍い橙	堅い	接合痕がある
4	181	67	B－4	縄文	胴下部			鈍い橙	堅い	接合痕がある・180と同体
4	182	74		縄文	胴部		少	橙	やや脆弱	検出
4	183	245	B－17	撚糸文	口縁部	白色粒少	極少量	明赤褐	やや脆弱	
4	184	254	C－17	撚糸文	胴部	白色粒少	極少量	明赤褐	やや脆弱	183と同体
4	185	48	C－17	縄文	胴部	白色粒少	極少量	明赤褐	やや脆弱	183と同体
4	186	256	C－17	縄文	胴部			明赤褐	堅い	
4	187	258	C－17	縄文	胴部			橙	堅い	186と同体
4	188	52	B－17	縄文	胴部			明赤褐	堅い	
4	189	72	C－17	縄文	胴下部	石英粒少		橙	堅い	
4	190	303	B－17	撚糸文	口縁部	白色粒少	極少量	明赤褐	やや脆弱	
4	191	248	B－17	縄文	胴部	白色粒少	極少量	明赤褐	やや脆弱	
4	192	70	B－4	縄文	胴下部	白色粒		鈍い橙	堅い	180と同体
4	193	71	D－22	縄文	胴下部	白色粒		鈍い赤褐	堅い	
4	194	257	C－17	縄文	胴部	石英粒少		橙	やや脆弱	沈線文と併用・174と同体
4	195	255	C－17	縄文	胴部			明赤褐	堅い	
4	196	49		縄文	胴部			鈍い橙	堅い	検出・沈線文が併用
4	197	4	A－15	縄文	胴部	石英粒少		明赤褐	堅い	
4	198	61	A－15	縄文	胴部	白色粒		暗赤褐	堅い	
4	199	241	B－9	縄文	胴部		少	鈍い赤褐	堅い	
4	200	274	C－17		胴部	白色粒少		橙	堅い	細沈線文が併用
4	201		A－18	条線文	胴部	石英粒少		明赤褐	やや脆弱	特殊焼り
5	202	84－159	C－21	縄文	口縁部	白色粒	多	褐	やや脆弱	特殊焼り
5	203	63	C－21	縄文	胴部	白色粒	多	褐	やや脆弱	202と同体
5	204	78	D－21	縄文	胴部	白色粒	多	褐	やや脆弱	特殊焼り・202と同体
5	205	277	C－21	縄文	胴部	白色粒	多	褐	やや脆弱	特殊焼り・202と同体
5	206	65	D－21	縄文	胴下部	白色粒		橙	やや脆弱	特殊焼り
5	207	158	C－21	縄文	胴部	白色粒	多	褐	やや脆弱	特殊焼り・№1土坑内・202と同体
5	208	85	D－21	縄文	胴部	白色粒	多	褐	やや脆弱	特殊焼り・202と胴体
5	209	81		縄文	胴部	白色粒	少	明赤褐	やや脆弱	特殊焼り・検出・202と胴体

表2　縄文時代土器属性表(7)

図版番号	図No	実測番号	グリッド名	文様	部位	胎土	繊維痕	色調	焼成	備考
5	210	79	E－23	縄文	胴部	白色粒	多	褐	やや脆弱	特殊撚り・202と同体
5	211	83	C－21	縄文	胴部	白色粒	多	褐	やや脆弱	特殊撚り・202と同体
5	212	2	C－21	縄文	胴部	白色粒	多	褐	やや脆弱	特殊撚り・202と同体
5	213	14	B－2	縄文	胴部	白色粒		純い橙	堅い	
5	214	77		縄文	胴部	白色粒	多	褐	やや脆弱	特殊撚り・検出・202と同体
5	215	80	D－21	縄文	胴部	白色粒	多	褐	やや脆弱	特殊撚り・202と同体
5	216	290	C－21	縄文	胴部	白色粒	多	褐	やや脆弱	特殊撚り・No 1 土坑内・202と同体
5	217	262	C－17		口縁部	石英粒少		橙	堅い	隆帯に沈線
5	218	42	B－2	縄文	胴部	白色粒		純い褐	やや脆弱	
5	219	316	A－4	縄文	胴部	石英粒少		純い褐	堅い	
5	220	315	A－4	縄文	胴部	石英粒少		純い褐	堅い	219と同体
6	221		A－4	縄文	胴部	石英粒少		純い褐	堅い	沈線文が併用・219と同体
6	222	313	A－4	縄文	胴部	石英粒少		純い褐	堅い	219と同体
6	223	314	A－4	縄文	胴部	石英粒少		純い褐	堅い	219と同体
6	224	279	B－11	縄文	胴部	白色粒		暗褐	堅い	
6	225	298	B－9	縄文	胴部	白色粒		暗褐	やや脆弱	
6	226	325	A－4	縄文	胴部			暗褐	堅い	
6	227	324	A－4	縄文	胴部	白色粒少		純い褐	堅い	226と同体
6	228	326	A－4	縄文	胴部	白色粒少		純い褐	堅い	226と同体
6	229	317	A－4	縄文	胴部	白色粒少		純い褐	堅い	226と同体
6	230	322	A－4	縄文	胴部	白色粒少		純い褐	堅い	細い沈線文が併用
6	231	323	A－4	縄文	胴部	白色粒少		純い褐	堅い	細い沈線文が併用・230と同体
6	232	318	A－4	縄文	胴部	白色粒少		純い褐	堅い	細い沈線文が併用・230と同体
6	233	60	D－21	縄文	胴部	白色粒少		明褐	やや脆弱	結束
6	234	320	A－4	櫛歯文	口縁部	白色粒		褐	堅い	三単位による
6	235	368	A－4	櫛歯文	口縁部	白色粒		褐	堅い	
6	236	7	C－13	縄文	胴部	白色粒	少	黒褐	やや脆弱	羽状縄文
6	237	28	D－12	縄文	胴部	白色粒	少	純い褐	やや脆弱	羽状縄文・236と同体
6	238	33	D－12	縄文	胴部	白色粒	少	純い褐	やや脆弱	羽状縄文・236と同体
6	239	3	C－21	縄文	胴部	白色粒	少	褐	堅い	

表2　縄文時代土器属性表(6)

図版番号	図No	実測番号	グリッド名	文様	部位	胎土	繊維痕	色調	焼成	備考
6	240	10	C－13	縄文	胴部	白色粒少	少	黒褐	堅い	羽状縄文・236と同体
6	241	36	D－12	縄文	胴部	白色粒少	少	黒褐	堅い	羽状縄文・236と同体
6	242	6	C－13	縄文	胴部	白色粒少	少	黒褐	堅い	羽状縄文・236と同体
6	243	1	C－13	縄文	胴部	白色粒少	少	黒褐	堅い	羽状縄文・236と同体
6	244	8	B－11	縄文	胴部	白色粒少	少	鈍い褐	堅い	羽状縄文・236と同体
6	245	31	D－12	縄文	胴部	白色粒少	少	黒褐	堅い	羽状縄文・236と同体
6	246	40	D－12	縄文	胴部	白色粒少	少	鈍い褐	堅い	羽状縄文・236と同体
6	247	12	C－13	縄文	胴部	白色粒少	少	黒褐	やや脆弱	羽状縄文・236と同体
6	248	38	D－12	縄文	胴部	白色粒少	少	鈍い褐	堅い	羽状縄文・236と同体
7	249	9	C－13	縄文	胴部	白色粒少	少	鈍い褐	堅い	羽状縄文・236と同体
7	250	16	D－22	縄文	胴部	白色粒	少	暗赤褐	堅い	羽状縄文・239と同体
7	251	11	C－13	縄文	胴部	白色粒少	少	鈍い褐	堅い	羽状縄文・236と同体
7	252	5	C－13	縄文	胴部	白色粒少	少	鈍い褐	堅い	羽状縄文・236と同体
7	253	22	C－13	縄文	胴部	白色粒少	少	鈍い褐	堅い	羽状縄文・236と同体
7	254	27	C－13	縄文	胴部	白色粒少	少	褐	堅い	羽状縄文・236と同体
7	255	39	D－12	縄文	胴部	白色粒少	少	鈍い褐	堅い	羽状縄文
7	256	24	C－13	縄文	胴部	白色粒少	少	鈍い黄褐	やや脆弱	羽状縄文
7	257	25		縄文	胴部	白色粒少	少	赤褐	堅い	検出・結束
7	258	19	C－13	縄文	胴部	白色粒少	少	鈍い黄褐	堅い	羽状縄文・236と同体
7	259	15	C－13	縄文	胴部	白色粒少	少	黒褐	堅い	羽状縄文・236と同体
7	260	30	C－13	縄文	胴部	白色粒少	少	鈍い橙	堅い	羽状縄文・236と同体
7	261	17	B－2	縄文	胴部	白色粒少	少	鈍い橙	堅い	羽状縄文・236と同体
7	262	59	B－17	縄文	胴部	石英粒 白色粒		明褐	やや脆弱	
7	263	23	B－11	縄文	胴部	白色粒少	少	黒褐	堅い	236と同体
7	264	40	D－12	縄文	胴部	白色粒少	少	黒褐	堅い	羽状縄文
7	265	21		縄文	口縁部	白色粒少	少	赤褐	やや脆弱	検出・結節
7	266	240	D－15	撚糸文	胴部	石英粒		赤褐	堅い	
7	267	41	D－12	縄文	胴部	白色粒少	少	明黄褐	やや脆弱	羽状縄文・236と同体
7	268	35	D－12	縄文	胴部	白色粒少	少	鈍い黄褐	やや脆弱	羽状縄文・236と同体
7	269	34	D－12	縄文	胴部	白色粒少	少	橙	やや脆弱	羽状縄文・236と同体
7	270	295	C－13	縄文	胴部	白色粒少	少	鈍い褐	やや脆弱	羽状縄文・236と同体
7	271	32	D－12	縄文	胴部	白色粒少	少	鈍い褐	やや脆弱	羽状縄文・236と同体

表2　縄文時代土器属性表(9)

図版番号	図No	実測番号	グリッド名	文様	部位	胎土	繊維痕	色調	焼成	備考
7	272	50	C－9	縄文	胴部	白色粒		赤褐	堅い	
7	273	280	A－19	撚糸文	胴部	白色粒少		明赤褐	堅い	
7	274	18	C－13	縄文	胴部	白色粒少	少	鈍い褐	堅い	236と同体
7	275	288	A－5	縄文	胴部	石英粒	少	明赤褐	やや脆弱	
7	276	294	B－21	縄文	胴部		少	明赤褐	やや脆弱	
7	277	292	B－8	縄文	胴部	白色粒		赤褐	堅い	
7	278	62	C－12	縄文	底部	白色粒	少	明褐	やや脆弱	
7	279	20	C－13	縄文	胴部	白色粒少	少	灰褐	やや脆弱	羽状縄文・236と同体
7	280	26	C－13	縄文	胴部	白色粒少	少	鈍い褐	やや脆弱	羽状縄文・236と同体
7	281	291	B－22	縄文	口縁部		少	明褐	やや脆弱	
7	282	282	A－19	縄文	胴部	白色粒	少	赤褐	堅い	
7	283	239	B－20	撚糸文	胴部			鈍い赤褐	堅い	
7	284	300	C－9	縄文	胴部		少	鈍い赤褐	堅い	
7	285	332	D－15	撚糸文	胴部	石英粒少		赤褐	やや脆弱	
7	286	338	B－20	縄文	胴部		少	明褐	やや脆弱	
7	287	334	D－15	縄文	胴部	白色粒少		鈍い赤褐	堅い	
7	288	43	B－2	竹管文	口縁部	白色粒		赤褐	堅い	縄文が併用・口縁部加飾
7	289	88	B－2	竹管文	口縁部	白色粒		灰褐	堅い	口縁部に加飾
7	290	45	B－9	条線文	胴部			明赤褐	堅い	結節状竹管文
7	291	44		竹管文	口縁部			鈍い赤褐	堅い	トレンチNo 4・290と同体
7	292	285	B－9	竹管文	胴部			明赤褐	堅い	290と同体
7	293	46	B－9	竹管文	口縁部	白色粒少		赤褐	堅い	
7	294	86	B－21	竹管文	口縁部	白色粒少		赤褐	堅い	
7	295	87	B－19	竹管文	口縁部	白色粒少		橙	堅い	縄文が併用・294と同体
7	296	90		沈線文 縄文	胴部	白色粒		赤褐	堅い	検出
7	297	283	B－11	沈線文	胴部	白色粒少		鈍い褐	堅い	
7	298	95	B－9	条線文	胴部	白色粒		鈍い赤褐	堅い	
7	299	93	B－9	条線文	胴部	白色粒		鈍い赤褐	堅い	298と同体
7	300	91	A－12	条線文	胴部	白色粒		鈍い赤褐	堅い	298と同体
7	301	97	C－17	条線文	胴部			赤褐	堅い	
7	302	92		条線文	胴部			明赤褐	堅い	検出・301と同体

表2　縄文時代土器属性表(2)

図版番号	図No	実測番号	グリッド名	文様	部位	胎土	繊維痕	色調	焼成	備考
7	303	94	A－9	条線文	胴部			鈍い赤褐	堅い	集合条線文
7	304	284	B－11	条線文	胴部			鈍い赤褐	堅い	
7	305	96	C－17	条線文	胴部			明赤褐	堅い	
7	306	99	A－9	条線文	胴部			灰褐	堅い	
7	307	89	B－9	条線文	胴部			赤褐	堅い	
7	308	98	A－9	条線文	胴部			赤褐	堅い	
8	309	217	C－24	沈線文 縄文	胴部	石英粒少 白色粒少		明赤褐	堅い	沈刺文
8	310	216	C－24	沈線文 縄文	胴部	石英粒少 白色粒少		赤褐	堅い	沈刺文・309と同体
8	311	219	D－24	沈線文 縄文	胴部	石英粒少 白色粒少		鈍い赤褐	堅い	309と同体
8	312	215	C－24	沈線文 縄文	胴部	石英粒少 白色粒少		赤褐	堅い	309と同体
8	313	218	C－24	竹管文	口縁部	石英粒少 白色粒少		赤褐	堅い	突帯文・309と同体
8	314	261	A－18	半截竹管文	胴部	石英粒		赤褐	堅い	突帯文
8	315	278	A－18	半截竹管文	胴部	石英粒		赤褐	堅い	円形文・314と同体
8	316	265	A－18	半截竹管文	胴部	石英粒		明赤褐	堅い	314と同体
8	317	264	A－18	縄文・半截竹管文	胴部	石英粒		赤褐	堅い	
8	318	263	A－18	縄文・半截竹管文	胴部	石英粒		赤褐	堅い	317と同体
8	319	305	A－18	半截竹管文	胴部	石英粒		明赤褐	堅い	317と同体
8	320	266	B－17	隆帯文	口縁部	鉄分粒		黄褐	堅い	
8	321	272		無文	口縁部	白色粒少		鈍い黄褐	堅い	折り返し口縁部
8	322	260	B－9	沈線文・縄文	胴部	石英粒少		鈍い黄橙	堅い	
8	323	276	C－17	無文	胴部			鈍い黄橙	やや脆弱	
8	324	281	A－18	縄文・半截竹管文	胴部	石英粒		明赤褐	堅い	成形痕
8	325	47		縄文・竹管文	胴部	白色粒		鈍い黄褐	堅い	検出

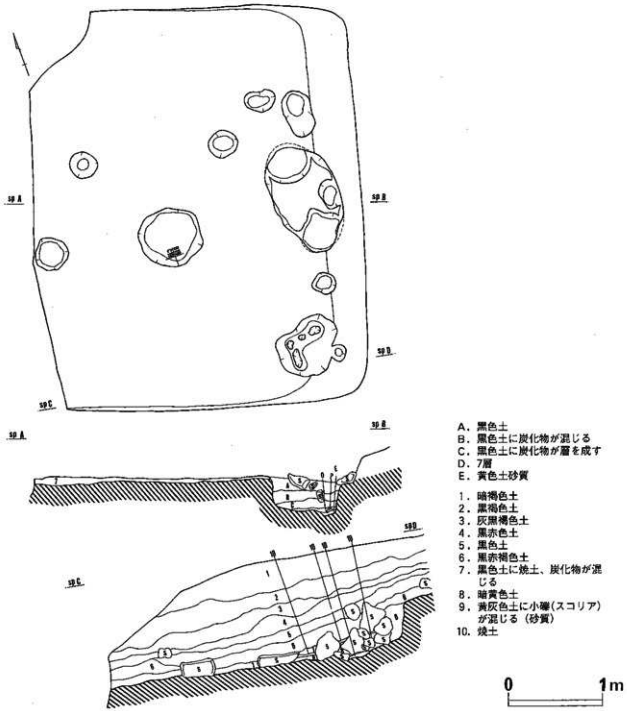
表2　縄文時代土器属性表(1)

第4節　古　　代

1　遺　構

1号住居址（第19図）

今回の調査で平安時代の住居址が1軒検出された。調査地の中では平地面が最大で、黒色土の堆積が多かった所である。しかし、後世の水田の造成その他によって、住居址の西側はプランの確定に欠くところもあった。この住居址はB－19グリッド付近に存在した。保存状態のよかった東側（山側）の1辺は4mで、住居址は方形を呈すると思われる。石組みカマドは南東のコーナーにあり、基底幅は70cmほどである。その北の壁に沿って2基の柱穴があり、その中間に貯蔵穴（推定）

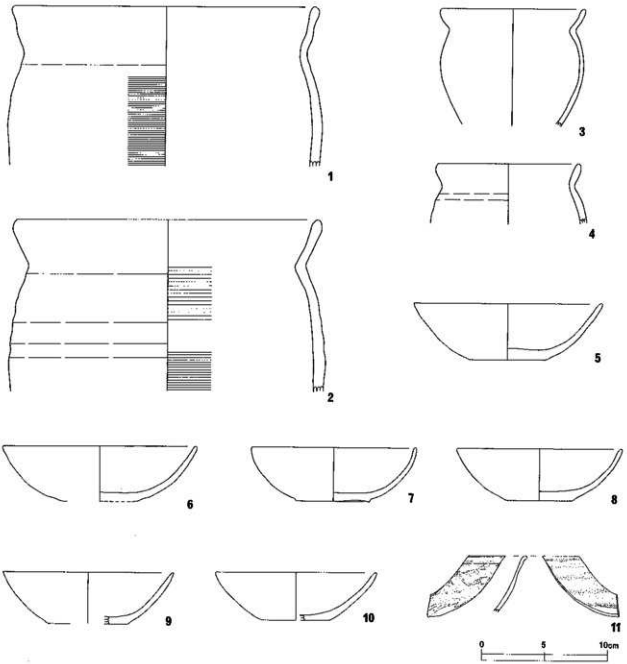


第19図　1号住居址

があった。長径70cmほどの楕円形で、深さは最大35cmであった。

土器はカマドや貯蔵穴付近に集中していた。また、工作台と思われる平板の石２個（長径39cm、短径32cm、厚さ８cm）がカマドの西側などに存在した。また、中央東よりに焼土ブロックがあった。柱穴もみられるが、床面の検出が不十分のため、上屋構造の復元は困難である。

過去における本調査での平安時代の住居址の検出は２例で、1984年調査では今回と同じ南東隅の石組みカマドを検出、1995年調査では住居南側中間にカマド検出例がある。南東隅カマド（焼土）検出例では田草川尻Ⅱ４号住居址（飯山市）があり、県下では少数例のようである。



第20図　１号住居址内出土の土師器

2　遺　物

覆土内遺物（第20図）

古代の遺物は１号住居址を中心として、その下方から検出されている。主な住居址の土器・灰釉陶器の破片の観察は表３のようである。

１号住居址の遺物からみると土師器の大型甕の形態、組成の坏、黒色土器の多用など平安時代Ⅲ期（10世紀初め）の所産とみられる。特に灰釉碗は灰釉が内外に刷毛塗りされた黒笹89号窯期の所産とみられる。量産された製品が、北信の山奥まで愛知県方面から運ばれたことになる。

この住居址の住人は、奥に控えた広大な山林資源に活路を見いだす生業を営んでいたと推定される。（椚原）

第５節　近世・近代

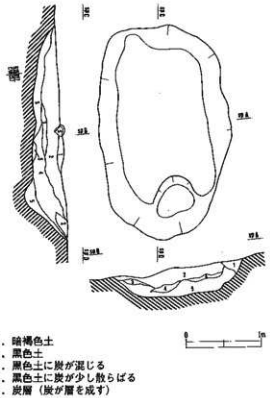
1　遺　構

２号土坑（第21図）

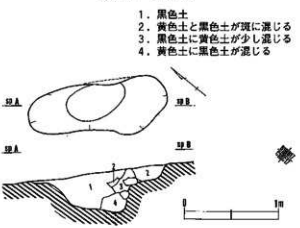
Ｂ－17グリッド付近で検出された土坑は長径2.85m、短径1.75mの楕円形で深さ平均35cm、最大50cmであった。底部には炭が層を成して存在し、闇業樹の樹種が多かった。用途としては、①この地方の民俗例にみられるように、穴の中に着火させた枝葉を次々と炎を上げないように積み重ね、最後に土を被せて蒸し焼きする簡易な製炭法の土坑、②開墾などに伴う樹木の焼却の土坑などが考えられる。

３号土坑（第22図）

Ｃ－18グリッドで検出された土坑は長径約150cm、短径約50cm、深さ約40cmを測り、楕円形を成す。覆土内遺物は検出されず、時期は不明であるが、地層様相から近代の遺構と考える。



第21図　２号土坑



第22図　３号土坑

2　遺　物

銭貨（第24図）

寛永通宝

Ｆ－23グリッドで検出され、保存良好。裏面に「文」と記されたいわゆる「文銭」と呼ばれるもので、江戸亀戸鋳銭所で寛文８年（1668）～天和３年（1683）の16年間に、この１箇所で量産されたものである。

銘銭

Ｂ－17グリッドから検出されたもので焼損しており、先例より小型で文字も読み取れない（無文？）ものである。

寛永鉄銭破片

Ｂ－17グリッドから検出された。破片となって「永」と「宝」の文字は読み取れる。鉄分が主で

銅分の少ない銭貨である。

銅貨①

B－18グリッド検出の銅貨は、焼損して文字とデザインはほとんど不明である。しかしよく観察すると、竜の模様と思しき盛り上がりが中央にみえる。直径2.75cm、厚さ1.2mm、量目7.13gを数える。明治6年（1873）～21年（1888）の間通用した1銭銅貨と推定される。ただし、竜の図柄の角ウロコと波ウロコの判別はできない。

銅貨②

B－17グリッド検出の銅貨も焼損し、欠損している。直径2.2cm、厚さ0.9～10mmである。本来の量目は3.56gといわれている。通用年月と図柄は①と同じである。半銭と思われる。

煙管（第23図7）

表面採取されたものである。首部（脂返し）だけの発見で、火皿は欠損している。銅製で右肩に銀鑞で接合されている。羅字につなぐ小口の直径は11mm、火皿下までの長さは3.5cmである。全体の長さが短く、携帯用の煙管と思われる。製作は1800年代と推定される。

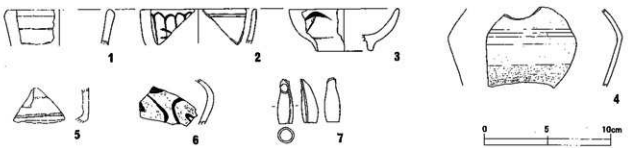
砥石（第25図1・2）

2点検出されている。原産地は異なるが、鎌や鉈を研磨するのに使用される中砥である。2はB－18グリッド検出の砥石で、切削により整形されたものである。使用の限界まで使用され、中程は薄くなって折損している。端部分が多く残存しているのは、鎌などを研いだ痕跡と推定される。1は攪乱層から発見の砥石で、成形は丸ノコ状の動力回転による切断面がみられる。使用の中途で縦半分に折損したものである。

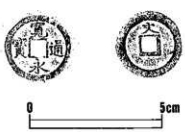
陶磁器（第23図1～6）

発見された陶磁器は、細片が多く器種の特定、生産地の同定も困難である。また現地で使用されたものもあろうが、集落の住居などから耕作の時などに運ばれてきたものも多いと推定される。製作年代は確定できないが、表4のようである。

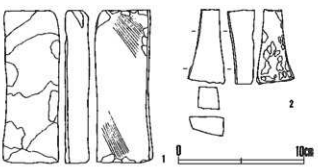
（檀原）



第23図　近代・現代の出土遺物



第24図　銭貨



第25図　砥石

図版番号	器　種	備　考	数　量	観　　察
1	甕	大型	1	ロクロ成形、くの字口縁、内湾して立ち上がる、口端は半円形。
2	甕	大型	1	ロクロ成形、くの字口縁、内湾せずに立ち上がり、外面に稜がある。
—	甕	大型	1	ロクロ成形、口縁部直線的に立ち上がり、口端部に平面あり、小破片。
3	甕	小型	1	ロクロ成形、くの字口縁、頸部より強く膨らむ、口端は半円形。
4	甕	小型	1	ロクロ成形、頸部は内部段があり、外部丸く立ち上がる。薄手。
5	坏		6	ロクロ成形、内湾して立ち上がる。右回転糸切り底で、胎土に小石を含む。
6	坏	黒色土器	1	ロクロ成形、内湾して傾斜ゆるく立ち上がる。胎土精選。
7	坏	黒色土器	1	大型（直径14.5cm）ロクロ成形、胎土精選。炭素の吸着不十分。
8	坏	黒色土器	2	ロクロ成形、胎土精選、外面下部に稜がある。
11	碗	灰釉	1	小破片、口端部が外に傾く、両面灰釉底面近くまで刷毛塗り。

表３　古代土師器属性表（第20図）

番号	グリッド名	器　種	釉　薬	厚　さ(cm)	観　　察
1	B－18	土瓶(急須)	外上部	0.2～0.3	灰釉白色、圏線３本、下部露胎
2	B－18	茶碗	外面	0.5	白色、圏線接続２本、ほか１本
3	A－19	茶碗	内外	0.25～0.4	外面鱗紋、内面花弁紋、型付け、淡褐色
4	A－15	茶碗	内外	0.4	明褐色
5	C－22	茶碗	内外	0.35～0.45	内面白色、外面白色斑点、梅円紋？、鉄釉
6	B－24	茶碗	内外	0.5～0.7	灰白色、畳付平面、薄い染付
7	C－19	茶碗	内外	0.4	暗灰色、外面圏線、内側貫入あり
8	A－14	茶碗	内外	0.3	明灰色、内口縁圏線２本、外面圏線１本
9	A－15	茶碗	内外	0.25～0.4	白色、外面薄い染付、型付け
10	B－24	茶碗	内外	0.4～0.6	白色、内圏線２本、外面圏線ほか
11	B－24	茶碗	内外	0.25～0.3	白色
12	B－17	茶碗	内外	0.4	黒色（鉄釉）
13	B－15	茶碗	内外	0.4	灰色、内面釉、外面露胎
14	C－22	擂鉢	内外	0.8	黒色、内面卸目、胎土赤褐色
15	撹乱	茶碗	内外	0.5～0.6	明黄褐色
16	撹乱	茶碗	内外	0.4～0.6	明灰色、細かな貫入
17	撹乱	茶碗	内外	0.4～0.7	灰白色
18	撹乱	茶碗	内外	0.25	灰白色、外面染付線太い
19	撹乱	茶碗	内外	0.35～0.4	明褐色、細かな貫入
20	撹乱	茶碗	内外	0.3～0.35	明灰色

表４　近代陶器属性表（第23図とは対応しない）

第4章　まとめ

上林中道南道跡の調査は、今回を含めて本調査が3回となる。それぞれ北信濃の縄文草創期末から早期、さらに後期に至る土器などの様相を明らかにしてきた。とくに早期の土器が注目されている。

今回の発掘調査は、国道292号の拡幅改良に伴うものである。調査地は以前の調査地より北の位置にある。遺跡は国道によって分断されているが、崖錐状の地形である。明治初年以降と推定される、棚田の造成によって地形が改変され、調査に制約をうけた面があった。しかし新知見の遺物の発見があり、さらに遺跡の性格が鮮明になる成果があった。

山ノ内町の発掘調査では、旧石器時代後期に属する削器は初めての発見となった。この削器は先頭部が錐状を成し、多機能をもつ石器だったと考えられる。糸巻形石器も新知見の石器で、分布や、所属時期に問題を提供している。

表裏縄文土器は1片の発見で、既発掘資料を補強している。撚糸文・縄文土器のほか、押型文土器には山形文・楕円文・平行線文土器があり、山形文には新古のものがみられるが、大部分は新しい段階のものと考えられる。

沈線文系・条痕文系土器は今回も検出され、中部山地での分布圏の広がりが注目される。また特殊な撚りによる縄文土器もあり、縄文文様の多様さを裏付けている。

縄文時代前期では、前葉の段階での、奥信濃の羽状縄文土器（縄文）の多用さを裏付けている。さらにその終末段階の土器が少量あり、十三菩提式土器のあり方とともに当該文化の拡散が注目される。

縄文時代中期と後期では、所属する土器が断片的にみられ、これも関東地方との交流や、山の資源を求める拠点遺跡の性格を表している。

平安時代の住居址は、本遺跡では3棟目の発見である。

石組みカマドをコーナーにもつ形態で、工作台と推定される平石があり、山または川の資源を求め、加工する山住み（山の民）の存在を示す住居とみられ、10世紀代でのこの地の生業・開拓・中央との関わりあいなどを示すものとみられる。

発掘調査は6月から8月の梅雨時を含む3ヶ月間であった。冷涼な場所での発掘であったが、雨にたたられたり、時には酷暑の日もあった。作業に当たられた中野広域シルバー人材センターの皆さんのご努力に感謝するとともに、当初からご配慮をいただいた事務局の山ノ内町教育委員会と、中野建設事務所、県教育委員会など関係者の方々に、意義ある調査ができましたことを深く感謝し終わりといたします。

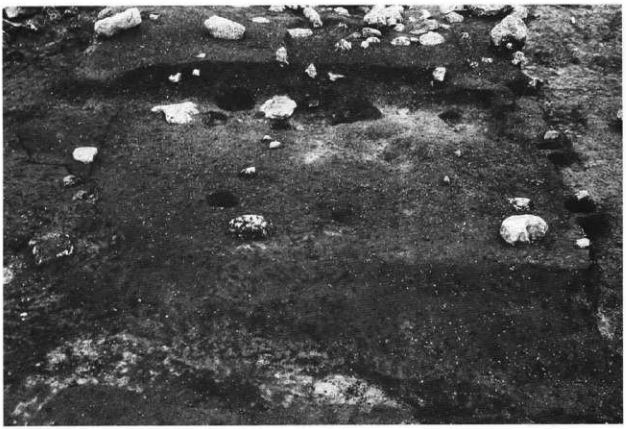
槿原　長則

図　　版

1. 鶴ヶ嶺城址から見た山ノ内盆地

2. 調査区全景（北から）

図版　2

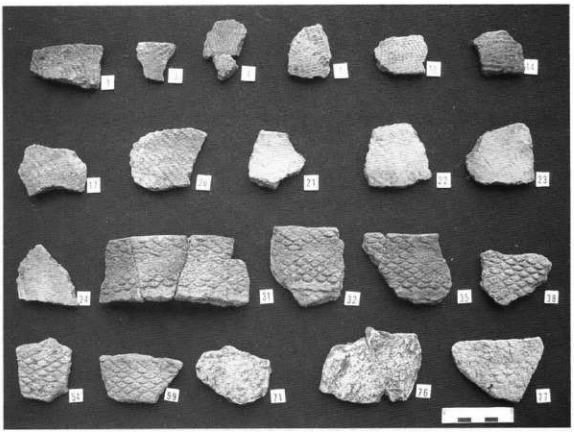


1. 1号住居址

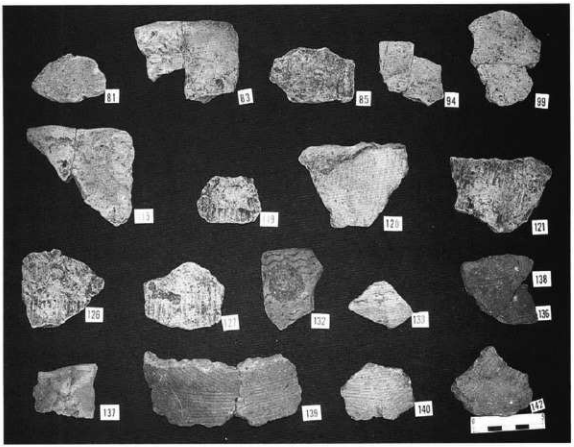
2. 1号住居址貯蔵穴

1. 1号土坑

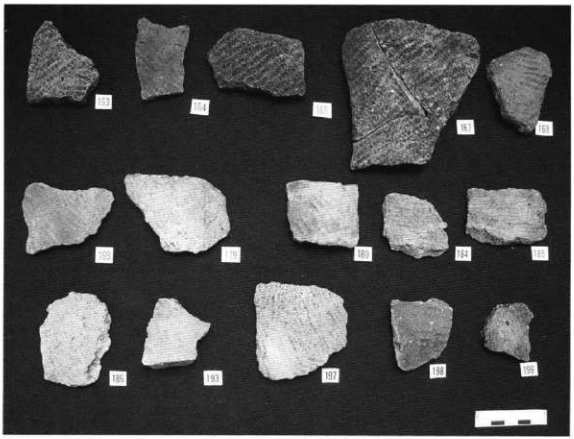
2. 2号土坑



1．縄文土器(1)

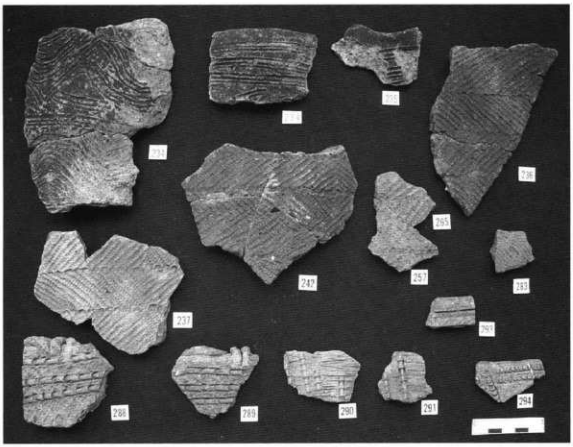


2．縄文土器(2)

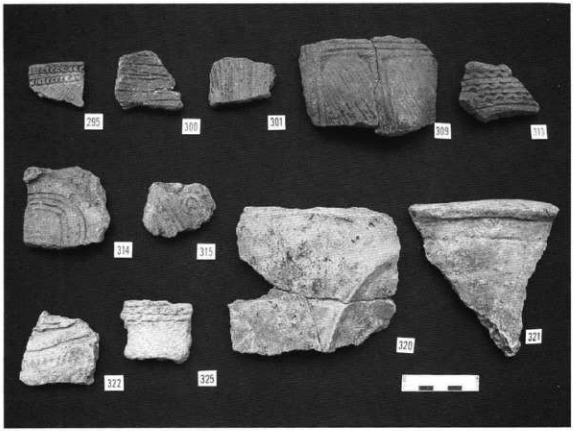


1. 縄文土器(3)

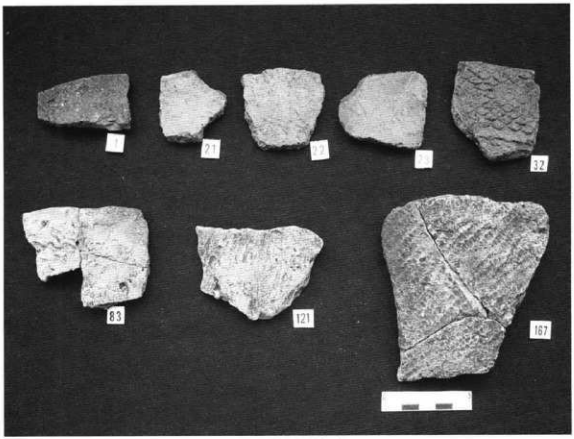
2. 縄文土器(4)



1．縄文土器(5)



2．縄文土器(6)



1．縄文土器(7)（表面）

2．縄文土器(8)（内面）

図版　8

1. 縄文時代石核と剥片

2. 縄文時代異形石器

1. 縄文時代石器

2. 縄文時代石鏃

1. 縄文時代敲石・特殊磨石

2. 灰釉陶器片

1. 作業風景

2. 発掘参加者

引用文献・参考文献

坪井清足ほか	『縄文土器大成』1（早・前期）	1981
山ノ内町誌刊行会	『山ノ内町誌』	1973
長野県史刊行会	『長野県下高井郡省野民俗誌稿』	1981
〃	『長野県史考古資料編』遺構・遺物	1988
〃	〃　主要遺跡北・東信	1982
農林水産省農林技術会議事務局編	『標準土色帖』	1995
宮崎朝雄・金子直行	「回転文様系土器群の関係」—表裏縄文系・撚糸文系・室谷上層・押型文系土器群の関係—『日本考古学』2	1995
山ノ内町和合会	『和合会の歴史』—志賀高原の歴史—	1975
上条区史刊行会	『上条区史』	1994
小熊博史	縄文時代早期終末における絡条体圧痕文土器の一様相—新潟県中魚沼地方の資料を中心に—『信濃』41－1	1989
高橋桂ほか	『三枚原遺跡』 木島平村教育委員会	1977
小林達雄	「遺跡における黒色土について」	
久馬一剛・永塚鎮男編	『土壌学と考古学』	1987
佐野之歴史刊行会	『佐野之歴史』	1979
戸沢充則編	『縄文時代研究事典』	1994
山ノ内町教育委員会	『下高井郡山ノ内町所在埋蔵文化財分布調査報告書』	1972
谷藤保彦ほか	『中期初頭の諸様相』縄文セミナーの会	1995
日本貨幣商協同組合	『日本貨幣カタログ』	1993
江戸遺跡研究会編	『図説　江戸考古研究事典』	2001
神村透	『木曽・稲荷沢遺跡（付・二本木遺跡）』日義村教育委員会	2003
檀原長則ほか	『上林中道南遺跡発掘調査報告書』	1985
〃	『　〃　Ⅱ』	1994

報告書抄録

ふりがな	かんばやしなかみちみなみいせき	種　別	住居跡　遺物散布地
書　名	上林中道南遺跡Ⅴ	主な時代	縄文時代早期～後期・平安時代
編集者	檀原　長則	主な遺構	平安時代住居址
編集機関	山ノ内町教育委員会	主な遺物	縄文時代押型文土器
所在地	〒381－0401 長野県下高井郡山ノ内町大字平穏3352番地1	シリーズ名	第18集
遺跡所在地	山ノ内町大字平穏上原		
遺跡番号	長野県9444		
遺跡位置	北緯36°43′29″　東経138°26′45″ 標高780～790m		
調査期間	平成15年6月2日～8月22日		
調査面積	3,227㎡		
調査原因	国道292号改良工事		

山ノ内町の埋蔵文化財発掘調査報告書　発行　山ノ内町教育委員会

1	永峯光一ほか	佐野（「長野県考古学会研究報告書」3）（縄文時代晩期）	1967
2	金井汲次ほか	上条遺跡発掘調査略報（縄文時代中期）	1967
3	〃	第2次上条遺跡調査略報（　〃　）	1968
4	〃	佐野遺跡範囲確認調査報告書（縄文時代晩期）	1975
5	〃	佐野遺跡第4次発掘調査報告書（　〃　）	1977
6	〃	〃　第5次　〃　（　〃　）	1978
7	田川幸生ほか	〃　第6次　〃　（　〃　）	1981
8	〃	伊勢宮（縄文時代後期）	1981
9	〃	佐野遺跡第7次　〃　（縄文時代晩期）	1982
10	檀原長則ほか	上林中道南遺跡　〃　（縄文時代草創期～平安時代）	1985
11	田川幸生ほか	佐野遺跡第8次　〃　（縄文時代晩期）	1989
12	〃	〃　第9次　〃　（　〃　）	1990
13	〃	〃　第10次　〃　（　〃　）	1993
14	檀原長則ほか	島崎遺跡試掘調査報告書（縄文時代中期）	1994
15	〃	上林中道南遺跡発掘調査報告書Ⅱ（縄文時代草創期～平安時代）	1995
16	〃	〃　Ⅲ（　〃　）	1996
17	〃	〃　試掘調査報告書Ⅳ（　〃　）	2003
18	〃	〃　発掘調査報告書Ⅴ（　〃　）	2004

上林中道南遺跡Ⅴ

――国道292号道路改良工事に伴う発掘調査報告書――

発行日　平成16年3月18日

発行者　山ノ内町教育委員会
〒381-0401 下高井郡山ノ内町大字平穏3352番地1
電話　0269－33－3111

印刷所　ほおずき書籍株式会社
〒381-0012　長野市柳原2133－5
電話　026－244－0235